

8-4 動物・植物・生態系

8-4-1 動物

工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行、トンネルの工事又は工事施工ヤード及び工事用道路の設置）及び鉄道施設（トンネル）の存在により、対象事業実施区域及びその周囲で、重要な種及び注目すべき生息地への影響のおそれがあることから、環境影響評価を行った。

(1) 調査

1) 調査すべき項目

ア. 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、魚類、底生動物の状況

調査項目は、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、魚類、底生動物の状況とした。

イ. 重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況

調査項目は、重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況とした。

ウ. 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況

調査項目は、注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況とした。

2) 調査の基本的な手法

ア. 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、魚類、底生動物の状況

文献調査により、地域に生息する動物関連の文献、資料を収集し整理した。なお、必要に応じて専門家へのヒアリングを行った。

現地調査の方法を、表 8-4-1-1 に示す。

表 8-4-1-1(1) 動物の調査方法

調査項目	調査方法	
哺乳類	任意確認 (フィールドサイン法)、夜間撮影	調査地域内を任意に踏査し、哺乳類の生息の根拠となる足跡、糞、食痕、掘り返し跡等のフィールドサイン（生息痕）の確認から、調査地域に生息する種の把握を行った。また、自動撮影装置を併用して、けもの道等の哺乳類の移動経路の把握に努めた。
	捕獲調査	【ネズミ類】 調査地域内に見られる樹林、草地等の様々な環境に地点を設定し、トラップを設置した。トラップにはシャーマントラップ及び墜落かんを使用した。シャーマントラップの餌はピーナッツ、ソーセージ、サツマイモ等を用いた。シャーマントラップの設置数は30個/1地点、墜落かんの設置数は2~3個/1地点とし、2晩設置した。3地点に設置した。
		【モグラ類】 モグラ塚等が見られる地点にモールトラップを設置した。モールトラップの設置数は10個/1地点とし、2晩設置した。3地点に設置した。

表 8-4-1-1(2) 動物の調査方法

調査項目		調査方法	
哺乳類	捕獲調査	【コウモリ類】	調査地域内におけるコウモリ類の通過経路と判断される場所において、ハーブトラップを用いて捕獲調査を実施した。ハーブトラップの設置数は1箇所/1地点とし2晩設置した。2地点に設置した。
鳥類	一般鳥類	任意確認	調査地域内を任意に踏査し、出現した鳥類の種名を記録した。重要な種が確認された場合は、確認位置、個体数、行動等を記録した。また、フクロウ類等の夜行性鳥類の生息確認を目的とした夜間調査も実施した。
		ラインセンサス法	調査地域内に設定した調査ルート上を、時速2kmで歩きながら一定範囲内(草地は片側50m、林内は片側25m程度)に出現する鳥類の種名及び個体数を記録した。調査にあたっては、8~10倍程度の双眼鏡を用いるとともに、姿、鳴き声により鳥類の確認を行った。調査時間帯は鳥類の活動が活発となる早朝に設定し、ルート数は3ルートとした。
		ポイントセンサス法	観察地点を定め、双眼鏡、望遠鏡を用いて30分程度の観察を行い、姿、鳴き声により確認される鳥類の種名及び個体数を記録した。3地点に設置した。
希少猛禽類	定点観察法	猛禽類の営巣が考えられる地域について繁殖地特定のための行動の確認を目的として、設定した定点において簡易無線機による情報交換を行いながら、8~10倍程度の双眼鏡及び20~60倍程度の望遠鏡を用いて、飛翔行動等を確認した。	
	営巣地調査	古巣及び営巣木の確認を目的として、生息の可能性が高い林内を歩き、樹林の状況、巣がかけられている営巣木の状況(樹種、樹高、胸高直径、地上0mに営巣等)、巣の形状(直径、厚さ)、周辺の地形、植生等を記録した。	
爬虫類・両生類	任意確認	調査地域内を任意に踏査し、目視観察及び捕獲、鳴き声等により確認された両生類・爬虫類の種名、個体数、確認位置等を記録した。なお、昼間は目視により個体を確認し、夜間はカエル類の鳴き声等を確認した。	
昆虫類	任意採集	調査地域内を任意に踏査し、目視観察及び鳴き声等で確認された昆虫類の種名を記録した。また、目視観察で種名の確認が困難な場合は、捕虫網等を用いて採集した。なお、捕虫網を振り回し昆虫類を採集するスウィーピング法、樹木の枝、葉等を叩き、付着している昆虫類を採集するビーティング法も併用した。また、現地での種の識別が困難なものは、標本として持ち帰り、同定を行った。	
	ライトトラップ法	夜間に光に誘引されるコウチュウ類、ガ類等の確認を目的として、調査地域内に見られる代表的な環境において、ボックス法によるライトトラップを実施した。 光源(ブラックライト等)の下に、捕虫器(ボックス)を付け、飛来した昆虫類が光源にぶつかり捕虫器に落下した個体を捕獲した。設置は夕刻に行い、日没前に点灯を開始し、1晩放置した後、翌日、ボックス内の昆虫類を回収した。3地点で実施した。	
	ベイトトラップ法	主に地表徘徊性のコウチュウ類、アリ類等の確認を目的として、調査地域内に見られる樹林、草地等の様々な環境に地点を設定し、トラップを設置した。トラップは、誘因餌を入れたプラスチックコップを20個/1地点で地中に埋設し、1晩設置した後、回収した。3地点で実施した。	
魚類	任意採集	調査地域内に設定した調査地点・範囲(河川)において、各種漁具(投網、タモ網、トラップ)を用いて任意に魚類を採取し、種名、個体数、確認環境等を記録した。また、潜水による目視観察も行った。なお、現地での種の識別が困難なものは、採取した魚類をホルマリン等で固定して標本として持ち帰り、同定を行った。	
底生動物	任意採集	調査地域内に設定した調査地点・範囲(河川)において、タモ網等を用いて任意に底生動物の採集を行った。採集した底生動物はホルマリンで固定して標本として持ち帰り、同定を行った。	
	コドラート法	コドラート付サーバーネット(25cm×25cm)を用いて、一定面積内に生息する底生動物の採集を行った。採集は1地点あたり同様の環境で3回実施した。採集した底生動物はホルマリンで固定して、標本として持ち帰り、同定を行った。4地点で実施した。	

イ. 重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況

生息が確認された種の内、表 8-4-1-2 に示す基準に該当するものを重要な種として選定した。
 なお、重要な種の選定にあたっては、必要に応じて専門家の指導・助言を受け、選定した。

表 8-4-1-2(1) 重要な種及び注目すべき生息地の選定基準

番号	文献及び法令名	区分
①	文化財保護法（昭和 25 年、法律第 214 号）	特天：特別天然記念物 天：天然記念物
②	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年、法律第 75 号）	国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種
③	自然環境保全法（昭和 47 年、法律第 85 号）	○：指定の地域
④	特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約（昭和 55 年）	○：指定湿地
⑤	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（平成 4 年）	○：自然遺産の登録基準に該当するもの
⑥	東京都における自然の保護と回復に関する条例（平成 12 年、東京都条例第 26 号）	希少：東京都希少野生動植物種
⑦	東京都文化財保護条例（昭和 51 年、東京都条例第 25 号） 町田市文化財保護条例（昭和 52 年、町田市条例第 30 号）	都：都指定天然記念物 市町村：市町村指定天然記念物
⑧	環境省第 4 次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物（平成 24 年、環境省）	EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群
	環境省第 4 次レッドリスト 汽水・淡水魚類（平成 25 年、環境省）	
⑨	東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～（2010 年版、東京都環境局）	EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 *：留意種
⑩	日本の地形レッドデータブック第 1 集（平成 12 年、小泉武栄・青木賢人）	○：動物、植物の生息地としての重要な地形
	日本の地形レッドデータブック第 2 集（平成 14 年、小泉武栄・青木賢人）	
⑪	神奈川県文化財保護条例（昭和 30 年、神奈川県条例第 13 号） 川崎市文化財保護条例（昭和 34 年、川崎市条例第 24 号）	県天：県指定天然記念物 市天：市指定天然記念物

表 8-4-1-2(2) 重要な種及び注目すべき生息地の選定基準

番号	文献及び法令名	区分
⑫	神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006(平成 18 年、神奈川県立生命の星・地球博物館)	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧 I 類 絶滅危惧 IA 類 絶滅危惧 IB 類 絶滅危惧 II 類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足 情報不足 A 情報不足 B 不明種 絶滅のおそれのある地域個体群

注 1. 選定基準①、⑫は、調査範囲に神奈川県が含まれる調査地域のみ適用する。

ウ. 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況

文献調査により、注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息及び生息環境の状況に関し、表 8-4-1-2 に示す基準に該当するものを調査した。

3) 調査地域

対象事業実施区域及びその周囲の内、非常口（都市部）を対象に工事の実施又は鉄道施設（非常口（都市部））の存在に係る動物への影響が生じるおそれがあると認められる地域とした。なお、東京都区部は、市街化が高度に進展しており、本事業により改変の可能性がある範囲は既に在来鉄道や幹線道路が隣接し、人工的な改変を受けた区域であるため、間接的な影響についても軽減していることから調査地域に選定していない。

4) 調査地点

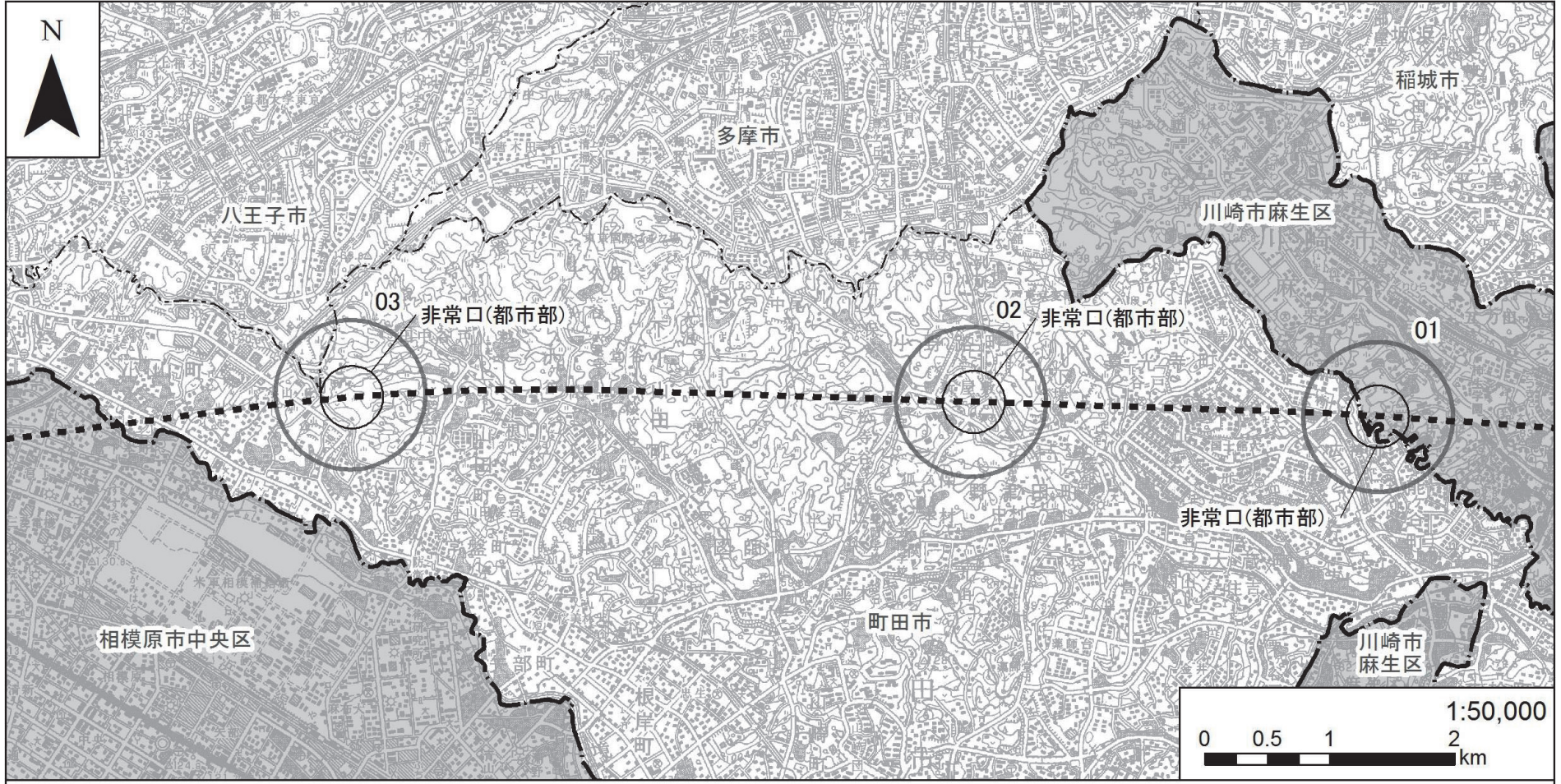
調査地域の内、自然環境の状況及び利用状況等を考慮し、動物相の現状を適切に把握することができる範囲に調査地点を設定した。

調査範囲は、改変区域から概ね 600m の範囲とし、猛禽類は「猛禽類保護の進め方（環境庁）」に基づき設定した。なお、設定にあたっては専門家から意見を聴取した。調査範囲は、表 8-4-1-3 及び図 8-4-1-1 に示すとおりである。

表 8-4-1-3 調査範囲

地域番号	地域名称	対象施設
01	片平能ヶ谷地区	非常口（都市部）
02	小野路地区	非常口（都市部）
03	上小山田地区	非常口（都市部）

8-4-1-5



凡例

- 計画路線(トンネル部)
- 都県境
- 区市境
- ^{OX} 調査地域

図 8-4-1-1 調査範囲

5) 調査期間等

現地調査は表 8-4-1-4 に示す時期に実施した。

表 8-4-1-4(1) 調査期間等

調査項目		調査手法		調査実施日		
哺乳類	任意確認（フィールドサイン法）、夜間撮影（1晩設置）	春季		平成 24 年 5 月 14 日～16 日		
		夏季		平成 24 年 7 月 6 日、8 月 8 日～10 日		
		秋季		平成 24 年 10 月 11 日、29 日～31 日、11 月 6 日～8 日		
		冬季		平成 25 年 1 月 23 日、2 月 6 日～8 日		
	捕獲調査（ネズミ類等）（2 晩設置）	夏季		平成 24 年 6 月 6 日～8 日、8 月 8 日～10 日		
		秋季		平成 24 年 10 月 29 日～31 日、11 月 6 日～8 日		
	捕獲調査（モグラ類）（2 晩設置）	夏季		平成 24 年 6 月 6 日～8 日、8 月 8 日～10 日		
		秋季		平成 24 年 10 月 29 日～31 日、11 月 6 日～8 日		
	捕獲調査（コウモリ類）（日没前後から 3～4 時間）	夏季		平成 24 年 8 月 2 日～4 日		
		秋季		平成 24 年 11 月 8 日～10 日		
	鳥類	一般鳥類	任意確認（春季、繁殖期、冬季は日没後 1～2 時間の夜間調査も実施）	春季		平成 24 年 4 月 16 日、5 月 10 日、11 日
				繁殖期		平成 24 年 5 月 21 日、6 月 7 日～9 日
夏季					平成 24 年 7 月 4 日～6 日、19 日	
秋季					平成 24 年 9 月 26 日、10 月 8 日、9 日	
冬季					平成 25 年 1 月 22 日、30 日、31 日	
ラインセンサス法 ポイントセンサス法（早朝に実施）			春季		平成 24 年 4 月 16 日、5 月 10 日、11 日	
			繁殖期		平成 24 年 5 月 21 日、6 月 7 日～9 日	
			夏季		平成 24 年 7 月 4 日～6 日、19 日	
			秋季		平成 24 年 9 月 26 日、10 月 8 日、9 日	
			冬季		平成 25 年 1 月 22 日、30 日、31 日	
希少猛禽類		定点観察法	第 1 営巣期	繁殖期		平成 23 年 12 月 6 日～8 日、20 日～22 日
						平成 24 年 1 月 10 日～13 日
					平成 24 年 2 月 21 日～23 日	
					平成 24 年 3 月 3 日～7 日、25 日～29 日	
					平成 24 年 4 月 11 日～13 日	
					平成 24 年 5 月 10 日～12 日	
					平成 24 年 6 月 11 日～13 日、23 日～25 日	
					平成 24 年 7 月 9 日～11 日	
					平成 24 年 8 月 9 日～11 日	
	非繁殖期				平成 24 年 10 月 10 日～12 日	
第 2 営巣期	繁殖期		平成 24 年 12 月 20 日～22 日			
			平成 25 年 1 月 21 日～23 日			
			平成 25 年 2 月 18 日～20 日			
			平成 25 年 3 月 18 日～20 日			
			平成 25 年 4 月 8 日～10 日			
			平成 25 年 5 月 13 日～15 日			
			平成 25 年 6 月 10 日～12 日			
			平成 25 年 7 月 8 日～10 日			
			平成 25 年 8 月 5 日～7 日			
	営巣地調査		非繁殖期		平成 24 年 11 月 7 日	

注 1. 哺乳類、鳥類の任意確認、猛禽類の定点観察法の調査は日中に行った。

表 8-4-1-4(2) 調査期間等

調査項目	調査手法	調査実施日	
爬虫類	任意確認 (春季、夏季は日没後1~2時間の夜間調査も実施)	春季	平成24年5月14日、6月4日~6日
		夏季	平成24年7月5日、6日、18日~20日
		秋季	平成24年10月11日、12日
両生類	任意確認 (早春季、春季、夏季は日没後1~2時間の夜間調査も実施)	早春季	平成24年4月4日~6日、16日、17日
		春季	平成24年5月14日、6月4日~6日
		夏季	平成24年7月5日、6日、18日~20日
		秋季	平成24年10月11日、12日
昆虫類	任意採集 ライトトラップ法 (ボックス法は1晩設置) ベイトトラップ法 (1晩設置)	春季	平成24年5月14日~17日
		夏季	平成24年7月19日~21日、25日、26日
		秋季	平成24年10月9日、10日、12日~14日
魚類	任意採集	春季	平成24年5月16日~19日、28日
		夏季	平成24年7月23日~26日
		秋季	平成24年10月30日~11月1日、9日
		冬季	平成25年1月9日~11日、2月13日
底生動物	任意採集 コドラート法	春季	平成24年5月16日~19日、28日
		夏季	平成24年7月23日~26日
		秋季	平成24年10月30日~11月1日、9日
		冬季	平成25年1月9日~11日、2月13日

注1. 爬虫類・両生類、昆虫類、魚類、底生動物の任意調査は日中に行った。

6) 調査結果

哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、魚類及び底生動物について現地調査の結果を以下に示す。なお、確認地点における改変の可能性がある範囲からの位置関係は、表 8-4-1-5 に基づいて整理した。

表 8-4-1-5 改変区域と確認位置の距離に関する定義

用語		定義
範囲内	改変の可能性がある範囲	計画施設及び工事施工ヤードが設置され、改変される可能性がある範囲
範囲外	改変の可能性がある範囲の近傍	改変の可能性がある範囲外でかつ、改変の可能性がある範囲の周辺250m未満
	相当離れた地域	改変の可能性がある範囲外でかつ、改変の可能性がある範囲の周辺250m以上

ア. 哺乳類

7) 哺乳類の状況

現地調査において6目10科13種の哺乳類が確認された（「資料編 14-1-1 哺乳類」参照）。
 現地調査結果の概要は、表 8-4-1-6 に示すとおりである。

表 8-4-1-6 哺乳類現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
春季	6目8科9種	アズマモグラ、キュウシュウノウサギ、ニホンアナグマ、ハクビシン、ヒナコウモリ科、ホンシュウヒミズ、ホンドアカネズミ、ホンドザル、ホンドタヌキ
夏季	4目7科9種	アズマモグラ、アライグマ、キュウシュウノウサギ、ニホンアナグマ、ハクビシン、ホンシュウカヤネズミ、ホンドアカネズミ、ホンドイタチ、ホンドタヌキ
秋季	4目6科7種	アズマモグラ、アライグマ、キュウシュウノウサギ、ハクビシン、ホンシュウカヤネズミ、ホンドアカネズミ、ホンドタヌキ
冬季	4目6科6種	アズマモグラ、アライグマ、キュウシュウノウサギ、ニッコウムササビ、ハクビシン、ホンドタヌキ
計	6目10科13種	

1) 重要な哺乳類の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な哺乳類は3目4科4種であった。文献及び現地で確認された重要な哺乳類とその選定基準は表 8-4-1-7 に示すとおりである。

表 8-4-1-7 重要な哺乳類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準							
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫
1	コウモリ	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ	○							NT		II類
2	サル	オナガザル	ホンドザル		○						NT		
3	ネズミ	リス	ニッコウムササビ	○	○						*		
4		ネズミ	ホンシュウカヤネズミ	○	○						VU		準絶
計	3目	4科	4種	3種	3種	0種	0種	0種	0種	0種	4種	0種	2種

注1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。

注2. 分類、配列等は、原則として「種の多様性（動植物分布調査）対象種一覧」（平成10年、環境庁）に準拠した。

注3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。

「町田市野生生物目録」（平成11年、町田市公園緑地課）

注4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。

①「文化財保護法」（昭和25年、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種

⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」（平成12年、東京都条例第26号）

希少：東京都希少野生動植物種

⑦「東京都文化財保護条例」（昭和51年、東京都条例第25号）

「町田市文化財保護条例」（昭和52年、町田市条例第30号）

都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物

⑧「環境省第4次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物」（平成24年、環境省）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

⑨「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～」(2010年版、東京都環境局)：南多摩地域区分における指定種

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

【留意種とした理由】

*：地域全体として絶滅のおそれはないが、一部地域で孤立化が進み、消失するおそれがあるため。

⑩「神奈川県文化財保護条例」(昭和30年、神奈川県条例第13号)

「川崎市文化財保護条例」(昭和34年8月3日、川崎市条例第24号)

県天：県指定天然記念物、市天：市指定天然記念物

⑪「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」(平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館)

絶滅：絶滅、野絶：野生絶滅、Ⅰ類：絶滅危惧Ⅰ類、ⅠA類：絶滅危惧ⅠA類、ⅠB類：絶滅危惧ⅠB類、Ⅱ類：絶滅危惧Ⅱ類、準絶：準絶滅危惧、減少：減少種、希少：希少種、要注：要注意種、注目：注目種、情報不：情報不足、情報A：情報不足A、情報B：情報不足B、不明：不明種、地域：絶滅のおそれのある地域個体群

注5. 選定基準⑩、⑪は、図8-4-1-1に示した調査範囲の内、神奈川県で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な哺乳類の確認地点は表8-4-1-8に示すとおりである。

表 8-4-1-8 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の生息環境	確認位置		
				変更の可能性 がある 範囲	変更の可能性が ある範囲外	
					変更の 可能性 がある 範囲の 近傍	相当 離れた 地域
哺乳類	1	ホンドザル	落葉広葉樹林		○	
	2	ニッコウムササビ	植林地、落葉広葉樹林			○
	3	ホンシュウカヤネズミ	草地（オギ群集）	○		

り) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である哺乳類の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

イ. 鳥類

7) 鳥類の状況

現地調査において15目35科80種の鳥類が確認された（「資料編 14-1-2 鳥類」参照）。現地調査結果の概要は、表 8-4-1-9 に示すとおりである。

表 8-4-1-9 鳥類現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
春季	13目29科52種	アオゲラ、ウグイス、エナガ、オオタカ、ガビチョウ、カワラヒワ、キジバト、キビタキ、コゲラ、シジュウカラ、スズメ、センダイムシクイ、ツバメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、ムクドリ、メジロ、ヤマガラ等
繁殖期	13目27科40種	アオゲラ、アオサギ、ウグイス、エナガ、ガビチョウ、カワラヒワ、キジ、キジバト、コゲラ、コジュケイ、シジュウカラ、スズメ、ツバメ、ハクセキレイ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、ムクドリ、メジロ等
夏季	13目26科38種	アオサギ、ウグイス、エナガ、ガビチョウ、カワラヒワ、キジ、キジバト、コゲラ、コジュケイ、シジュウカラ、スズメ、ツバメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、ホトトギス、ムクドリ、メジロ、ヤマガラ等
秋季	11目25科45種	アオゲラ、ウグイス、エナガ、カケス、ガビチョウ、カワラヒワ、キジバト、コゲラ、コジュケイ、シジュウカラ、スズメ、ツグミ、ハクセキレイ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、ムクドリ、メジロ、モズ等
冬季	12目28科59種	アオジ、アカゲラ、ウグイス、エナガ、カケス、ガビチョウ、カワラヒワ、キジバト、コゲラ、シジュウカラ、ジョウビタキ、スズメ、ツグミ、ハクセキレイ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、メジロ、モズ、ヤマガラ等
計	15目35科80種	

1) 重要な鳥類の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な鳥類は16目36科84種であった。文献及び現地で確認された重要な鳥類とその選定基準は表 8-4-1-10 に示すとおりである。

表 8-4-1-10(1) 重要な鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準									
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫		
												繁殖期	非繁殖期		
1	キジ	キジ	ウズラ	○							VU	CR		II類	
2			ヤマドリ	○							EN		II類	II類	
3			キジ	○	○							NT			
4	カモ	カモ	オシドリ	○							DD	VU	希少	減少	
5	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	○	○							NT			
6	ハト	ハト	アオバト	○	○							NT		注目	注目

表 8-4-1-10(2) 重要な鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準										
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑫			
													繁殖期	非繁殖期		
7	ペリカン	サギ	ヨシゴイ	○							NT	VU		Ⅱ類		
8			ミゾゴイ	○							VU	EN		Ⅰ類		
9			ササゴイ	○								VU		Ⅱ類		
10			ダイサギ	○	○							NT				
11			チュウサギ	○								NT	NT			
12			コサギ	○	○							NT				
13	ツル	クイナ	クイナ	○							NT				Ⅱ類	
14			ヒクイナ	○							NT	EN		Ⅰ類		
15			バン	○	○							VU				
16			オオバン	○	○							VU				
17	カッコウ	カッコウ	ホトトギス	○	○						NT					
18			ツツドリ	○							NT					
19			カッコウ	○							NT		Ⅱ類			
20	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	○						NT	CR		Ⅱ類			
21	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ	○							NT		減少			
22	チドリ	チドリ	タゲリ	○							VU			Ⅱ類		
23			イカルチドリ	○							VU		準絶	注目		
24			コチドリ	○							VU		注目			
25		シギ	ヤマシギ	○							VU			希少		
26			タシギ	○							VU			注目		
27			クサシギ	○							VU			準絶		
28			キアシシギ	○							VU			Ⅱ類		
29			イソシギ	○	○						VU		希少	注目		
30			ハマシギ	○							NT	VU		Ⅱ類		
31		タマシギ	タマシギ	○						VU	EN		Ⅰ類	希少		
32		タカ	ミサゴ	ミサゴ		○					NT	EN				
33	タカ		ハチクマ	○	○						NT	CR		Ⅰ類		
34			トビ	○	○						NT					
35			ツミ	○	○						VU		Ⅱ類	希少		
36			ハイタカ	○	○						NT	VU	不足	希少		
37			オオタカ	○	○		○				NT	VU		Ⅱ類	希少	
38			サシバ	○	○						VU	CR		Ⅰ類		
39			ノスリ	○	○						VU		Ⅱ類	希少		
40	フクロウ	フクロウ	オオコノハズク	○							CR		Ⅰ類	希少		
41			フクロウ	○	○						EN		準絶			
42			アオバズク	○							EN		Ⅱ類			

表 8-4-1-10(3) 重要な鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準										
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫			
													繁殖期	非繁殖期		
43	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン	○								CR		II類		
44			カワセミ	○	○							NT				
45			ヤマセミ	○									VU		希少	
46		ブッポウソウ	ブッポウソウ	○							EN	CR		I類		
47	キツツキ	キツツキ	アカゲラ	○	○							NT				
48			アオゲラ	○	○							NT				
49	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	○	○							VU				
50			コチョウゲンボウ	○								DD				
51			チゴハヤブサ	○	○								DD			
52			ハヤブサ	○	○		○					VU	VU		I類	希少
53	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	○							VU	CR		II類		
54		カササギヒタキ	サンコウチョウ	○	○							VU		II類		
55		モズ	チゴモズ	○								CR	CR			
56			モズ	○	○								NT		減少	
57			アカモズ	○								EN	CR		I類	
58		クイタダキ	クイタダキ	○	○								NT		希少	
59		ヒバリ	ヒバリ	○	○								VU		減少	
60		ツバメ	ツバメ		○										減少	
61			コシアカツバメ	○									NT		減少	
62		ウグイス	ウグイス	○	○								NT			
63			ヤブサメ	○									VU		準絶	
64		ムシクイ	メボソムシクイ		○										II類	
65			センダイムシクイ	○	○								VU		準絶	
66		ヨシキリ	オオヨシキリ	○									VU		II類	
67		ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	○	○								EN		準絶	
68		ミソサザイ	ミソサザイ	○									NT			
69		カワガラス	カワガラス	○									VU		減少	減少
70		ヒタキ	トラツグミ	○									VU		減少	
71			クロツグミ	○									NT		II類	
72			コサメビタキ	○	○								VU		I類	
73	オオルリ		○	○									NT		準絶	

表 8-4-1-10(4) 重要な鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準									
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫		
													繁殖期	非繁殖期	
74	スズメ	イワヒバリ	カヤクグリ	○								NT			
75		セキレイ	キセキレイ		○									減少	
76			セグロセキレイ	○	○							NT		減少	
77		アトリ	カワラヒワ		○									減少	
78			ベニマシコ	○	○							NT			
79			イスカ	○								NT			
80			ウソ	○	○							NT			
81			イカル	○	○							NT			
82			ホオジロ	ノジコ	○							NT			希少
83		アオジ			○									Ⅱ類	
84		クロジ		○	○							NT		Ⅰ類 減少	
計		16目	36科	84種	78種	43種	0種	2種	0種	0種	20種	78種	0種	51種	22種

- 注 1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。
- 注 2. 分類、配列等は、原則として「日本鳥類目録 改訂第 7 版」（平成 24 年、日本鳥学会）に準拠した。
- 注 3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。
「町田市野生生物目録」（平成 11 年、町田市公園緑地課）
- 注 4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。
①「文化財保護法」（昭和 25 年、法律第 214 号）
特天：特別天然記念物、天：天然記念物
②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年、法律第 75 号）
国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種
⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」（平成 12 年、東京都条例第 26 号）
希少：東京都希少野生動植物種
⑦「東京都文化財保護条例」（昭和 51 年、東京都条例第 25 号）
「町田市文化財保護条例」（昭和 52 年、町田市条例第 30 号）
都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物
⑧「環境省第 4 次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物」（平成 24 年、環境省）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、
VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
⑨「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～」(2010 年版、東京都環境局)：南多摩地域区分における指定種
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、
NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種
⑩「神奈川県文化財保護条例」（昭和 30 年、神奈川県条例第 13 号）
「川崎市文化財保護条例」（昭和 34 年 8 月 3 日、川崎市条例第 24 号）
県天：県指定天然記念物、市天：市指定天然記念物
⑪「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（平成 18 年、神奈川県立生命の星・地球博物館）
絶滅：絶滅、野絶：野生絶滅、Ⅰ類：絶滅危惧Ⅰ類、ⅠA類：絶滅危惧ⅠA類、ⅠB類：絶滅危惧ⅠB類、
Ⅱ類：絶滅危惧Ⅱ類、準絶：準絶滅危惧、減少：減少種、希少：希少種、要注：要注意種、
注目：注目種、情報不：情報不足、情報 A：情報不足 A、情報 B：情報不足 B、不明：不明種、
地域：絶滅のおそれのある地域個体群
- 注 5. 選定基準⑩、⑪は、図 8-4-1-1 に示した調査範囲の内、神奈川県が含まれる調査地域で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な鳥類の確認地点は表 8-4-1-11 に示すとおりである。

表 8-4-1-11 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		
				改変の 可能性 がある 範囲	改変の可能性が ある範囲外	
					改変の 可能性 がある 範囲の 近傍	相当 離れた 地域
鳥類	1	キジ	耕作地、草地	○	○	○
	2	カイツブリ	河川、池			○
	3	アオバト	落葉広葉樹林			○
	4	ダイサギ	河川		○	○
	5	コサギ	河川		○	○
	6	バン	河川、池			○
	7	オオバン	河川、池			○
	8	ホトトギス	落葉広葉樹林		○	○
	9	イソシギ	河川			○
	10	ミサゴ	(生息環境は分布しない)			○
	11	ハチクマ	(生息環境は分布しない)			○
	12	トビ	市街地、落葉広葉樹林、耕作地	○	○	○
	13	ツミ	落葉広葉樹林	○	○	○
	14	ハイタカ	落葉広葉樹林	○	○	○
	15	オオタカ	落葉広葉樹林、耕作地	○	○	○
	16	サシバ	落葉広葉樹林、耕作地	○	○	○
	17	ノスリ	落葉広葉樹林、耕作地	○	○	○
	18	フクロウ	落葉広葉樹林	○		○
	19	カワセミ	河川	○	○	○
	20	アカゲラ	落葉広葉樹林	○	○	○
	21	アオゲラ	落葉広葉樹林		○	○
	22	チョウゲンボウ	耕作地	○	○	○
	23	チゴハヤブサ	(生息環境は分布しない)			○
	24	ハヤブサ	草地、耕作地		○	○
	25	サンコウチョウ	植林地		○	○
	26	モズ	耕作地、果樹園・桑園・茶畑、市街地	○	○	○
	27	キクイタダキ	落葉広葉樹林、植林地	○		○
	28	ヒバリ	耕作地			○
	29	ツバメ	市街地、耕作地	○	○	○
	30	ウグイス	落葉広葉樹林、竹林	○	○	○
	31	メボソムシクイ	落葉広葉樹林			○
	32	センダイムシクイ	落葉広葉樹林			○
	33	ゴジュウカラ	落葉広葉樹林			○
	34	コサメビタキ	落葉広葉樹林			○
	35	オオルリ	落葉広葉樹林			○
	36	キセキレイ	河川		○	○
	37	セグロセキレイ	耕作地、市街地	○	○	○
	38	カワラヒワ	耕作地	○	○	○
	39	ベニマシコ	耕作地			○
	40	ウソ	落葉広葉樹林		○	○
	41	イカル	落葉広葉樹林			○
	42	アオジ	落葉広葉樹林	○	○	○
	43	クロジ	落葉広葉樹林			○

り) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である鳥類の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

ウ. 爬虫類

7) 爬虫類の状況

現地調査において2目5科8種の爬虫類が確認された（「資料編 14-1-3 爬虫類」参照）。現地調査結果の概要は、表 8-4-1-12 に示すとおりである。

表 8-4-1-12 爬虫類現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
春季	1目4科7種	アオダイショウ、シマヘビ、ニホンカナヘビ、ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ヒバカリ、ヤマカガシ
夏季	2目5科7種	アオダイショウ、シマヘビ、ニホンカナヘビ、ニホンスッポン、ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ヤマカガシ
秋季	2目5科7種	シマヘビ、ニホンスッポン、ニホンカナヘビ、ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ヒバカリ、ヤマカガシ
計	2目5科8種	

1) 重要な爬虫類の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な爬虫類は2目7科12種であった。文献及び現地で確認された重要な爬虫類とその選定基準は表 8-4-1-13 に示すとおりである。

表 8-4-1-13 重要な爬虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準								
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
1	カメ	イシガメ	クサガメ	○								DD		
2		スッポン	ニホンスッポン		○					DD	CR + EN			
3	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ	○	○						*			
4		トカゲ	ヒガシニホントカゲ	○	○						VU		要注	
5		カナヘビ	ニホンカナヘビ	○	○						NT			
6		ナミヘビ	アオダイショウ	アオダイショウ	○	○						NT		要注
7			シマヘビ	シマヘビ	○	○						NT		要注
8			ジムグリ	ジムグリ	○							VU		
9			ヒバカリ	ヒバカリ	○	○						NT		準絶
10			シロマダラ	シロマダラ	○							VU		
11			ヤマカガシ	ヤマカガシ	○	○						VU		要注
12			クサリヘビ	ニホンマムシ	○							CR + EN		要注
計	2目	7科	12種	11種	8種	0種	0種	0種	0種	1種	12種	0種	6種	

注1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。

注2. 分類、配列等は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（平成24年、日本爬虫両棲類学会）に準拠した。

注3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。

「町田市野生生物目録」（平成11年、町田市公園緑地課）

注 4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。

- ①「文化財保護法」(昭和 25 年、法律第 214 号)
特天：特別天然記念物、天：天然記念物
- ②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 4 年、法律第 75 号)
国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種
- ⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」(平成 12 年、東京都条例第 26 号)
希少：東京都希少野生動植物種
- ⑦「東京都文化財保護条例」(昭和 51 年、東京都条例第 25 号)
「町田市文化財保護条例」(昭和 52 年、町田市条例第 30 号)
都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物
- ⑧「環境省第 4 次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物」(平成 24 年、環境省)
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧 I 類、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、
VU：絶滅危惧 II 類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- ⑨「東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)～東京都レッドリスト～」(2010 年版、東京都環境局)：南多摩
地域区分における指定種
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、VU：絶滅危惧 II 類、
NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種
【留意種とした理由】
*：急速に都市化が進んでおり、すみかとなる古い家屋等に変化が生じる等、本種の生息環境が悪化する可能性があるため
- ⑩「神奈川県文化財保護条例」(昭和 30 年、神奈川県条例第 13 号)
「川崎市文化財保護条例」(昭和 34 年 8 月 3 日、川崎市条例第 24 号)
県天：県指定天然記念物、市天：市指定天然記念物
- ⑫「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(平成 18 年、神奈川県立生命の星・地球博物館)
絶滅：絶滅、野絶：野生絶滅、I 類：絶滅危惧 I 類、IA 類：絶滅危惧 IA 類、IB 類：絶滅危惧 IB 類、
II 類：絶滅危惧 II 類、準絶：準絶滅危惧、減少：減少種、希少：希少種、要注：要注意種、
注目：注目種、情報不：情報不足、情報 A：情報不足 A、情報 B：情報不足 B、不明：不明種、
地域：絶滅のおそれのある地域個体群

注 5. 選定基準⑩、⑫は、図 8-4-1-1 に示した調査範囲の内、神奈川県で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な爬虫類の確認地点は表 8-4-1-14 に示すとおりである。

表 8-4-1-14 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		
				変更の 可能性 がある 範囲	変更の可能性が ある範囲外	
					変更の 可能性 がある 範囲の 近傍	相当 離れた 地域
爬虫類	1	ニホンスッポン	河川、池			○
	2	ニホンヤモリ	市街地、耕作地		○	○
	3	ヒガシニホントカゲ	落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地		○	○
	4	ニホンカナヘビ	草地、耕作地、緑の多い住宅地		○	○
	5	アオダイショウ	落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地		○	○
	6	シマヘビ	耕作地、草地、水田、緑の多い住宅地		○	○
	7	ヒバカリ	耕作地、水田、草地、緑の多い住宅地			○
	8	ヤマカガシ	水田、耕作地、落葉広葉樹林			○

り) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である爬虫類の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

エ. 両生類

7) 両生類の状況

現地調査において2目5科7種の両生類が確認された（「資料編 14-1-4 両生類」参照）。現地調査結果の概要は、表 8-4-1-15 に示すとおりである。

表 8-4-1-15 両生類現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
早春季	2目4科6種	アカハライモリ、アズマヒキガエル、ツチガエル、ニホンアカガエル、ニホンアマガエル等
春季	2目4科5種	アカハライモリ、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエル、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル
夏季	2目5科6種	アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエル、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル等
秋季	2目3科4種	アカハライモリ、ニホンアカガエル、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル
計	2目5科7種	

1) 重要な両生類の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な両生類は2目4科7種であった。文献及び現地で確認された重要な両生類とその選定基準は表 8-4-1-16 に示すとおりである。

表 8-4-1-16 重要な両生類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準								
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫	
1	有尾	イモリ	アカハライモリ	○	○						NT	EN		I類
2	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル	○	○							VU		
3		アカガエル	ツチガエル	○	○							CR		要注
4			ニホンアカガエル	○	○							EN		II類
5			ヤマアカガエル	○	○							EN		
6			トウキョウダルマガエル	○								NT	EN	
7		アオガエル	シュレーゲルアオガエル	○	○							VU		要注
計		2目	4科	7種	7種	6種	0種	0種	0種	0種	2種	7種	0種	5種

注1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。

注2. 分類、配列等は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（平成24年、日本爬虫両棲類学会）に準拠した。

注3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。

「町田市野生生物目録」（平成11年、町田市公園緑地課）

注4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。

①「文化財保護法」（昭和25年、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種

- ⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」(平成 12 年、東京都条例第 26 号)
希少：東京都希少野生動植物種
- ⑦「東京都文化財保護条例」(昭和 51 年、東京都条例第 25 号)
「町田市文化財保護条例」(昭和 52 年、町田市条例第 30 号)
都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物
- ⑧「環境省第 4 次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物」(平成 24 年、環境省)
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧 I 類、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、
VU：絶滅危惧 II 類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- ⑨「東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)～東京都レッドリスト～」(2010 年版、東京都環境局)：南多摩地域区分における指定種
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、VU：絶滅危惧 II 類、
NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種
- ⑩「神奈川県文化財保護条例」(昭和 30 年、神奈川県条例第 13 号)
「川崎市文化財保護条例」(昭和 34 年 8 月 3 日、川崎市条例第 24 号)
県天：県指定天然記念物、市天：市指定天然記念物
- ⑪「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(平成 18 年、神奈川県立生命の星・地球博物館)
絶滅：絶滅、野絶：野生絶滅、I 類：絶滅危惧 I 類、IA 類：絶滅危惧 IA 類、IB 類：絶滅危惧 IB 類、
II 類：絶滅危惧 II 類、準絶：準絶滅危惧、減少：減少種、希少：希少種、要注：要注意種、
注目：注目種、情報不：情報不足、情報 A：情報不足 A、情報 B：情報不足 B、不明：不明種、
地域：絶滅のおそれのある地域個体群

注 5. 選定基準⑩、⑪は、図 8-4-1-1 に示した調査範囲の内、神奈川県で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な両生類の確認地点は表 8-4-1-17 に示すとおりである。

表 8-4-1-17 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置	
				変更の 可能性 がある 範囲	変更の可能性が ある範囲外 変更の 可能性 がある 範囲の 近傍 相当 離れた 地域
両 生 類	1	アカハライモリ	水田、水路、水たまり		○ ○
	2	ニホンアマガエル	水田、池、耕作地、草地、 落葉広葉樹林、植林地		○ ○
	3	ツチガエル	水路、水辺		○
	4	ニホンアカガエル	水田、水路、池、落葉広葉 樹林、植林地		○
	5	ヤマアカガエル	水田、水路、池、落葉広葉 樹林、植林地		○ ○
	6	シュレーゲルアオガエル	水田、水路、水辺		○ ○

り) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である両生類の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

オ. 昆虫類

7) 昆虫類の状況

現地調査において15目169科643種の昆虫類が確認された(「資料編 14-1-5 昆虫類」参照)。
 現地調査結果の概要は、表 8-4-1-18 に示すとおりである。

表 8-4-1-18 昆虫類現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
春季	14目109科354種	アシナガコガネ、ウスイロクビボソジョウカイ、クズノチビタマムシ、クワハムシ、コアオハナムグリ、コジャノメ、コバネヒョウタンナガカメムシ、セボシジョウカイ、トビイロケアリ、ニセヒメジョウカイ、ニホンカワトンボ、ヒゲナガハナノミ、ヒゲブトハナムグリ、ヒメオビオオキノコ、ヒメカメノコテントウ、フタホシアトキリゴミムシ、フトナガニジゴミムシダマシ、ベニカミキリ、ヤマサナエ、ルリオオキノコ等
夏季	12目105科271種	アオバネサルハムシ、アミメアリ、アメイロアリ、ウラギンシジミ、オオホシオナガバチ、オニヤンマ、カシルリオトシブミ、キタテハ、クロウリハムシ、クロヒカゲ本土亜種、クロヤマアリ、コブウンカ、スジグロシロチョウ、トウキョウヒメハンミョウ、ナミアゲハ、ニイニイゼミ、ハラヒシバッタ、ヒメウラナミジャノメ、ベダリアテントウ、ホソハリカメムシ等
秋季	13目99科260種	アシブトハナアブ、イネホソミドリカスミカメ、ウリハムシ、オオヨコバイ、カネタタキ、キンケハラナガツチバチ、クサヒバリ、クルマバッタモドキ、クロヒラタケシキスイ、クロミヤクイチモンジョコバイ、コバネヒョウタンナガカメムシ、ショウリョウバッタモドキ、ツユムシ、トゲヒシバッタ、トビイロケアリ、ヒナバッタ、ホシササキリ、マダラスズ、モトヨツコブゴミムシダマシ、ヤチスズ等
計	15目169科643種	

1) 重要な昆虫類の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な昆虫類は7目46科84種であった。文献及び現地で確認された重要な昆虫類とその選定基準は表 8-4-1-19 に示すとおりである。

表 8-4-1-19(1) 重要な昆虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準								
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫	
1	トンボ	イトトンボ	オオイトトンボ	○								EN		IA 類
2			キイトトンボ	○								NT		IB 類
3			モートンイトトンボ	○							NT	CR		IB 類
4		モノサシトンボ	モノサシトンボ	○								DD		準絶
5		アオイトトンボ	ホソミオツネントンボ	○								NT		
6			オツネントンボ	○								NT		II 類

表 8-4-1-19(2) 重要な昆虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準											
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫				
7	トンボ	カワトンボ	ニホンカワトンボ	○	○							VU		準絶			
8			サナエトンボ	ヤマサナエ	○	○							VU		要注		
9		コサナエ		○									CR		IB 類		
10		ヤンマ	コシボソヤンマ	○	○								VU		要注		
11			カトリヤンマ	○									VU		準絶		
12		エゾトンボ	コヤマトンボ		○								NT		準絶		
13		トンボ	ハラビロトンボ	○										NT		要注	
14			シオヤトンボ		○											要注	
15			チョウトンボ	○										NT		IB 類	
16			マイコアカネ	○										DD		不足	
17			ヒメアカネ	○	○									NT		要注	
18		バッタ	ケラ	ケラ		○										要注	
19			コオロギ	クマコオロギ	○									DD			
20				ヒメコオロギ	○									DD			
21				ヤチスズ	○	○									DD		
22				タンボコオロギ	○										DD		
23			マツムシ	マツムシ	○									CR		要注	
24	クマスズムシ		クマスズムシ		○								DD				
25	キリギリス		クツワムシ	○										CR		要注	
26			カヤキリ	○										CR			
27			オナガササキリ		○											要注	
28	バッタ		クルマバッタ	○	○									CR			
29			ショウリョウバッタモドキ	○	○									VU		要注	
30			イナゴモドキ	○										CR		準絶	
31	カメムシ	セミ	ハルゼミ	○									EN		要注		
32		イトアメンボ	イトアメンボ	○									VU		IA 類		
33		タイコウチ	タイコウチ	○										VU			
34		ミズムシ	ミゾナシミズムシ	○										NT			
35		ハナカメムシ	ズイムシハナカメムシ	○										NT		II 類	
36	コウチュウ	ハンミョウ	エリザハンミョウ	○										NT			
37			ニワハンミョウ	○											NT		
38		オサムシ	ヒラタマルゴミムシ	○										DD			
39			アシミゾヒメヒラタゴミムシ	○											VU		

表 8-4-1-19(3) 重要な昆虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準									
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫		
40	コウチ ユウ	オサムシ	キアシマルガタ ゴミムシ	○								VU			
41			アカガネアオゴ ミムシ	○								NT		準絶	
42			コアトワアオゴ ミムシ	○									DD		準絶
43			ムナビロアオゴ ミムシ	○									NT		
44			ツヤキベリアオ ゴミムシ	○								VU			
45			ニセトックリゴ ミムシ	○									NT		
46			ホソクビゴ ミムシ	ミイデラゴミム シ	○	○								*1	
47	ゲンゴロウ	マルチビゲンゴ ロウ	○								NT			絶滅	
48		コシマチビゲン ゴロウ	○								VU			不明	
49	ガムシ	シジミガムシ	○								EN				
50		コガムシ	○	○							DD	NT		準絶	
51	ハネカクシ	チャムネハラホ ソハネカクシ	○									NT			
52		クシヒゲハネカ クシ	○									NT			
53	クワガタム シ	ミヤマクワガタ	○									NT		要注	
54	コガネムシ	マエカドコエン マコガネ	○									DD			
55		ヒゲコガネ	○									VU		II類	
56		ハンノヒメコガ ネ	○									DD			
57		ヒメトラハナム グリ	○									NT			
58		ハナムグリ	○									DD			
59	タママシ	ウバタママシ	○									NT		準絶	
60	コメツキム シ	ウバタマコメツ キ	○									NT		準絶	
61	ホタル	ヘイケボタル	○									NT		準絶	
62	カミキリム シ	ツヤケシハナカ ミキリ	○									NT			
63		フタコブルリハ ナカミキリ	○									NT			
64		ミドリカミキリ	○									NT		準絶	
65		クロトラカミキ リ	○									VU		II類	
66		シロスジカミキ リ	○									NT		要注	
67	ゾウムシ	オオアオゾウム シ	○									DD			

表 8-4-1-19(4) 重要な昆虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準								
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
68	ハチ	コンボウハバチ	ホシアシブトハバチ	○						DD				
69		セイボウ	オオセイボウ本土亜種	○						DD				
70		アリ	トゲアリ	○	○					VU				
71		スズメバチ	ヤマトアシナガバチ	○						DD	DD		II類	
72			モンスズメバチ	○	○					DD				
73		コシブトハナバチ	ルリモンハナバチ	○						DD				
74		ミツバチ	クロマルハナバチ	○						NT	DD			
75		ハエ	ガガンボ	ミカドガガンボ	○							*2		
76	ムシヒキアブ		オオイシアブ	○	○						*3			
77	ハナアブ		クロベッコウハナアブ	○							*4			
78	チョウ	セセリチョウ	ホソバセセリ	○							*5		II類	
79		タテハチョウ	ウラギンスジヒョウモン	○						VU	CR+EN		IB類	
80			ヒョウモンチョウ本州中部亜種	○						VU				
81			オオムラサキ	○						NT				準絶
82		ジャノメチョウ	ウラナミジャノメ本土亜種	○						VU				絶滅
83		スズメガ	スキバホウジャク	○						VU				
84		ヤガ	コシロシタバ	○						NT				
計	7目	46科	84種	79種	17種	0種	0種	0種	0種	22種	64種	0種	43種	

注1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。

注2. 分類、配列等は、原則として「日本産野生生物目録 無脊椎動物編II」（平成7年、環境庁）に準拠した。

注3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。

「町田市野生生物目録」（平成11年、町田市公園緑地課）

注4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。

①「文化財保護法」（昭和25年、法律第214号）

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年、法律第75号）

国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種

⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」（平成12年、東京都条例第26号）

希少：東京都希少野生動植物種

⑦「東京都文化財保護条例」（昭和51年、東京都条例第25号）

「町田市文化財保護条例」（昭和52年、町田市条例第30号）

都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物

⑧「環境省第4次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物」（平成24年、環境省）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧I類、CR：絶滅危惧IA類、EN：絶滅危惧IB類、

VU：絶滅危惧II類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

⑨「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～」(2010年版、東京都環境局)：南多摩地域区分における指定種

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧IA類、EN：絶滅危惧IB類、VU：絶滅危惧II類、

NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

【留意種とした理由】

- *1: 草地環境を指標する種であること、また幼虫はケラの卵塊を食して成長するという特殊な生態を有するため。
- *2: 幼虫は細流の砂地中に生息することから、里山的な環境を指標する種であり、なおかつ大型種で確認が容易であるため。
- *3: 成虫、幼虫ともに捕食性であり、幼虫は朽木に生息し、成虫も樹林環境周辺に見られることから、良好な樹林環境を指標する種で、環境指標性が高いため。
- *4: 本種の幼虫はクロスズメバチ類の巣に寄生することから、クロスズメバチ類が生息している良好な樹林環境の指標となるため。
- *5: 疎林草原の減少により、絶滅危惧種になる可能性があるため。

①「神奈川県文化財保護条例」(昭和30年、神奈川県条例第13号)

「川崎市文化財保護条例」(昭和34年8月3日、川崎市条例第24号)

県天: 県指定天然記念物、市天: 市指定天然記念物

②「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」(平成18年、神奈川県立生命の星・地球博物館)

絶滅: 絶滅、野絶: 野生絶滅、I類: 絶滅危惧I類、IA類: 絶滅危惧IA類、IB類: 絶滅危惧IB類、

II類: 絶滅危惧II類、準絶: 準絶滅危惧、減少: 減少種、希少: 希少種、要注: 要注意種、

注目: 注目種、情報不: 情報不足、情報A: 情報不足A、情報B: 情報不足B、不明: 不明種、

地域: 絶滅のおそれのある地域個体群

注5. 選定基準①、②は、図8-4-1-1に示した調査範囲の内、神奈川県で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な昆虫類の確認地点は表8-4-1-20に示すとおりである。

表 8-4-1-20 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		
				改変の 可能性 がある 範囲	改変の可能性が ある範囲外	
			改変の 可能性 がある 範囲の 近傍		相当 離れた 地域	
昆虫類	1	ニホンカワトンボ	水田、小河川			○
	2	ヤマサナエ	水田、小河川			○
	3	コシボソヤンマ	小河川			○
	4	コヤマトンボ	小河川			○
	5	シオヤトンボ	湿性地			○
	6	ヒメアカネ	水田、小河川			○
	7	ケラ	耕作地			○
	8	ヤチスズ	耕作地、草地			○
	9	クマスズムシ	落葉広葉樹		○	
	10	オナガササキリ	草地、耕作地			○
	11	クルマバッタ	耕作地、草地			○
	12	ショウリョウバッタモドキ	耕作地、草地		○	○
	13	ミイデラゴミムシ	耕作地			○
	14	コガムシ	小河川			○
	15	トゲアリ	落葉広葉樹林		○	○
	16	モンズズメバチ	落葉広葉樹林			○
	17	オオイシアブ	落葉広葉樹林		○	

ウ) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である昆虫類の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

カ. 魚類

7) 魚類の状況

現地調査において3目5科12種の魚類が確認された（「資料編 14-1-6 魚類」参照）。現地調査結果の概要は表 8-4-1-21 に示すとおりである。

表 8-4-1-21 魚類現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
春季	3目4科10種	アブラハヤ、オイカワ、カワヨシノボリ、タイリクバラタナゴ、タモロコ、トウヨシノボリ（型不明）、ドジョウ、ホトケドジョウ、メダカ南日本集団、モツゴ
夏季	3目5科11種	アブラハヤ、オイカワ、オオクチバス、カワヨシノボリ、コイ、タモロコ、トウヨシノボリ（偽橙色型）、ドジョウ、ホトケドジョウ、メダカ南日本集団等
秋季	3目4科8種	アブラハヤ、オイカワ、カワヨシノボリ、コイ、ドジョウ、ホトケドジョウ、メダカ南日本集団、モツゴ
冬季	3目4科8種	アブラハヤ、オイカワ、カワヨシノボリ、コイ、ドジョウ、ホトケドジョウ、メダカ南日本集団、モツゴ
計	3目5科12種	

4) 重要な魚類の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な魚類は5目7科11種であった。文献及び現地確認された重要な魚類とその選定基準は表 8-4-1-22 に示すとおりである。

表 8-4-1-22 重要な魚類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準								
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫	
1	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	スナヤツメ類	○							VU	EN		IB類
2	ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ	○							EN	VU		
3	コイ	コイ	キンブナ	○							VU	VU		IB類
4			アブラハヤ	○	○							NT		準絶
5			カマツカ	○								NT		準絶
6		ドジョウ	ドジョウ	○	○						DD			
7			シマドジョウ	○								VU		準絶
8		ホトケドジョウ	○	○						EN	VU		IB類	
9	ナマズ	ギギ	ギバチ	○							VU	VU		IA類
10		ナマズ	ナマズ	○								*1		注目
11	ダツ	メダカ	メダカ南日本集団	○	○						VU	CR+EN		IA類
計	5目	7科	11種	11種	4種	0種	0種	0種	0種	7種	10種	0種	9種	

注1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。

注2. 分類、配列等は、原則として「河川水辺の国勢調査 最新版 平成24年度版生物リスト」（平成24年、リバーフロント研究所）に準拠した。

注3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。

「町田市野生生物目録」(平成 11 年、町田市公園緑地課)

注 4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。

- ①「文化財保護法」(昭和 25 年、法律第 214 号)
特天：特別天然記念物、天：天然記念物
- ②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 4 年、法律第 75 号)
国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種
- ⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」(平成 12 年、東京都条例第 26 号)
希少：東京都希少野生動植物種
- ⑦「東京都文化財保護条例」(昭和 51 年、東京都条例第 25 号)
「町田市文化財保護条例」(昭和 52 年、町田市条例第 30 号)
都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物
- ⑧「環境省第 4 次レッドリスト 汽水・淡水魚類」(平成 25 年、環境省)
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧 I 類、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、
VU：絶滅危惧 II 類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- ⑨「東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)～東京都レッドリスト～」(2010 年版、東京都環境局)：南多摩
地域区分における指定種
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、VU：絶滅危惧 II 類、
NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種

【留意種とした理由】

*1：現状では絶滅のおそれは少ないが、産卵場所及び仔稚魚の生育場所となる環境が減少しており、今後の動向に留意する必要があるため。

- ⑩「神奈川県文化財保護条例」(昭和 30 年、神奈川県条例第 13 号)
「川崎市文化財保護条例」(昭和 34 年 8 月 3 日、川崎市条例第 24 号)
県天：県指定天然記念物、市天：市指定天然記念物
- ⑫「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(平成 18 年、神奈川県立生命の星・地球博物館)
絶滅：絶滅、野絶：野生絶滅、I 類：絶滅危惧 I 類、IA 類：絶滅危惧 IA 類、IB 類：絶滅危惧 IB 類、
II 類：絶滅危惧 II 類、準絶：準絶滅危惧、減少：減少種、希少：希少種、要注：要注意種、
注目：注目種、情報不：情報不足、情報 A：情報不足 A、情報 B：情報不足 B、不明：不明種、
地域：絶滅のおそれのある地域個体群

注 5. 選定基準⑩、⑫は、図 8-4-1-1 に示した調査範囲の内、神奈川県で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な魚類の確認地点は表 8-4-1-23 に示すとおりである。

表 8-4-1-23 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		
				改変の 可能性 がある 範囲	改変の可能性が ある範囲外	
					改変の 可能性 がある 範囲の 近傍	相当 離れた 地域
魚類	1	アブラハヤ	小河川			○
	2	ドジョウ	小河川		○	○
	3	ホトケドジョウ	小河川			○
	4	メダカ南日本集団	小河川		○	○

り) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である魚類の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

キ. 底生動物

7) 底生動物の状況

現地調査において 24 目 66 科 133 種の底生動物が確認された（「資料編 14-1-7 底生動物」参照）。現地調査結果の概要は表 8-4-1-24 に示すとおりである。

表 8-4-1-24 底生動物現地調査結果の概要

調査時期	確認種数	主な確認種
春季	17 目 33 科 65 種	イトミミズ亜科、オニヤンマ、カワナ、シマイシビル、シロハラコカゲロウ、ミズムシ、ミルンヤンマ、ヤマサナエ、Nais 属、Pristina 属等
夏季	21 目 47 科 79 種	ウスイロフトヒゲコカゲロウ、ウデマガリコカゲロウ、オナガサナエ、オニヤンマ、コシボソヤンマ、シロハラコカゲロウ、ヤマサナエ、Neocaridina 属、Psychomyia 属、Tipula 属等
秋季	20 目 42 科 79 種	ウスイロフトヒゲコカゲロウ、ウデマガリコカゲロウ、ウルマーシマトビケラ、サホコカゲロウ、シロハラコカゲロウ、ミズムシ、ヤマサナエ、Chaetocladus 属、Cheumatopsyche 属、Tipula 属等
冬季	23 目 50 科 91 種	アメリカザリガニ、オニヤンマ、カワナ、コシボソヤンマ、サワガニ、シロハラコカゲロウ、ヘビトンボ、ミズムシ、ヤマサナエ、ヤマトヒメユスリカ族等
計	24 目 66 科 133 種	

4) 重要な底生動物の分布、生息状況及び生息環境の状況

文献調査及び現地調査により確認された重要な底生動物は 2 目 4 科 4 種であった。文献及び現地で確認された重要な底生動物とその選定基準は表 8-4-1-25 に示すとおりである。

表 8-4-1-25 重要な底生動物確認種一覧

No.	目名	科名	種名	確認状況		選定基準							
				文献	現地	①	②	⑥	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫
1	基眼	モノアラガイ	モノアラガイ		○						NT		
2	エビ	テナガエビ	スジエビ		○						*1		
3		サワガニ	サワガニ		○						*2		
4		モクズガニ	モクズガニ		○						*3		
計	2 目	4 科	4 種	0 種	4 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	3 種	0 種	0 種

- 注 1. 文献調査及び現地調査によって位置情報が確認された種について確認状況欄にそれぞれ○を記載した。なお、文献調査では市単位の分布情報を整理した。
- 注 2. 分類、配列等は、原則として「河川水辺の国勢調査 最新版 平成 24 年度版生物リスト」（平成 24 年、リバーフロント研究所）に準拠した。
- 注 3. 整理対象とした文献は以下のとおりである。
「町田市野生生物目録」（平成 11 年、町田市公園緑地課）
- 注 4. 重要種の選定基準は、以下のとおりである。
- ①「文化財保護法」（昭和 25 年、法律第 214 号）
特天：特別天然記念物、天：天然記念物
 - ②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年、法律第 75 号）
国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種
 - ⑥「東京都における自然の保護と回復に関する条例」（平成 12 年、東京都条例第 26 号）
希少：東京都希少野生動植物種

- ⑦「東京都文化財保護条例」(昭和 51 年、東京都条例第 25 号)
「町田市文化財保護条例」(昭和 52 年、町田市条例第 30 号)
都：都指定天然記念物、市町村：市町村指定天然記念物
- ⑧「環境省第 4 次レッドリスト 哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物」(平成 24 年、環境省)
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧 I 類、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、
VU：絶滅危惧 II 類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- ⑨「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）～東京都レッドリスト～」(2010 年版、東京都環境局)：南多摩地域区分における指定種
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧 IA 類、EN：絶滅危惧 IB 類、VU：絶滅危惧 II 類、
NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、*：留意種
【留意種とした理由】
*1：典型的な「中流域に生息するエビ」で、緩やかな流れに水草が育つ良好な河川の指標となるため。
*2：清流に生息するカニであるが、低地では生息環境が失われた地域が多く、山間部では樹木の伐採、倒木の放置等により良好な生息地が狭められつつあるため。
*3：河川の中流域で生活し、産卵のために降海する両側回遊種であり、稚ガニは海から遡上するために河口域の汚染の指標となる。また、生態的に競合する特定外来生物、チュウゴクモクズガニ（シャンハイガニ）の動向とともに個体数の増減に留意する必要があるため。
- ⑩「神奈川県文化財保護条例」(昭和 30 年、神奈川県条例第 13 号)
「川崎市文化財保護条例」(昭和 34 年 8 月 3 日、川崎市条例第 24 号)
県天：県指定天然記念物、市天：市指定天然記念物
- ⑪「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(平成 18 年、神奈川県立生命の星・地球博物館)
絶滅：絶滅、野絶：野生絶滅、I 類：絶滅危惧 I 類、IA 類：絶滅危惧 IA 類、IB 類：絶滅危惧 IB 類、
II 類：絶滅危惧 II 類、準絶：準絶滅危惧、減少：減少種、希少：希少種、要注：要注意種、
注目：注目種、情報不：情報不足、情報 A：情報不足 A、情報 B：情報不足 B、不明：不明種、
地域：絶滅のおそれのある地域個体群

注 5. 選定基準⑩、⑪は、図 8-4-1-1 に示した調査範囲の内、神奈川県で確認された種のみ適用する。

また、現地で確認された重要な底生動物の確認地点は表 8-4-1-26 に示すとおりである。

表 8-4-1-26 現地調査で確認された重要な種の確認位置

分類	番号	種名	確認種の生息環境	確認位置		
				変更の可能性 がある 範囲	変更の可能性が ある範囲外	
					変更の 可能性 がある 範囲の 近傍	相当 離れた 地域
底生動物	1	モノアラガイ	小河川			○
	2	スジエビ	小河川			○
	3	サワガニ	小河川			○
	4	モクズガニ	小河川			○

ウ) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である底生動物の生息の状況及び生息環境の状況

調査の結果、注目すべき生息地は確認されなかった。

(2) 予測及び評価

1) 予測

ア. 予測項目

予測項目は、工事の実施及び鉄道施設の存在に係る重要な種への影響とした。

イ. 予測の基本的な手法

既存の知見の引用又は解析により、重要な種及び地域個体群への影響の種類、影響の箇所、影響の程度について予測した。

ウ. 予測地域

予測地域は、工事の実施又は鉄道施設の存在に係る重要な種への影響が生じるおそれがあると認められる地域として、調査地域と同様とした。

エ. 予測対象時期

予測対象時期は、工事中及び鉄道施設の完成時とした。

オ. 予測対象種の選定

予測対象種は、文献調査及び現地調査によって対象事業実施区域及びその周囲に生息する可能性があると考えられる重要な種とした。

重要な種の予測対象種の選定結果は表 8-4-1-27 示すとおりである。なお、希少種保護の観点から、重要な種の詳細な確認位置は明示していない。

表 8-4-1-27(1) 予測対象種の選定結果

分類	区分	種名
哺乳類	現地調査で確認された種 (3 種)	ホンドザル、ニッコウムササビ、ホンシ ュウカヤネズミ
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種(1 種)	ヒナコウモリ
鳥類	現地調査で確認された種 (43 種)	キジ、カイツブリ、アオバト、ダイサギ、 コサギ、バン、オオバン、ホトトギス、 イソシギ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、ツ ミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノス リ、フクロウ、カワセミ、アカゲラ、ア オゲラ、チョウゲンボウ、チゴハヤブサ、 ハヤブサ、サンコウチョウ、モズ、キク イタダキ、ヒバリ、ツバメ、ウグイス、 メボソムシクイ、センダイムシクイ、ゴ ジュウカラ、コサメビタキ、オオルリ、 キセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒ ワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、アオジ、 クロジ
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種 (41 種)	ウズラ、ヤマドリ、オシドリ、ヨシゴイ、 ミゾゴイ、ササゴイ、チュウサギ、クイ ナ、ヒクイナ、ツツドリ、カッコウ、ヨ タカ、ヒメアマツバメ、タゲリ、イカル チドリ、コチドリ、ヤマシギ、タシギ、 クサシギ、キアシシギ、ハマシギ、タマ シギ、オオコノハズク、アオバズク、ア カショウビン、ヤマセミ、ブッポウソウ、 コチョウゲンボウ、サンショウクイ、チ ゴモズ、アカモズ、コシアカツバメ、ヤ ブサメ、オオヨシキリ、ミソサザイ、カ ワガラス、トラツグミ、クロツグミ、カ ヤクグリ、イスカ、ノジコ
爬虫類	現地調査で確認された種 (8 種)	ニホンスッポン、ニホンヤモリ、ヒガシ ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、アオダ イショウ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカ ガシ
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種(4 種)	クサガメ、ジムグリ、シロマダラ、ニホ ンマムシ
両生類	現地調査で確認された種 (6 種)	アカハライモリ、ニホンアマガエル、ツ チガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカ ガエル、シュレーゲルアオガエル
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種(1 種)	トウキョウダルマガエル

表 8-4-1-27(2) 予測対象種の選定結果

分類	区分	種名
昆虫類	現地調査で確認された種 (17 種)	ニホンカワトンボ、ヤマサナエ、コシボソヤンマ、コヤマトンボ、シオヤトンボ、ヒメアカネ、ケラ、ヤチスズ、クマスズムシ、オナガササキリ、クルマバッタ、ショウリョウバッタモドキ、ミイデラゴミムシ、コガムシ、トゲアリ、モンズズメバチ、オオイシアブ
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種 (67 種)	オオイトトンボ、キイトトンボ、モートンイトトンボ、モノサシトンボ、ホソミオツネントンボ、オツネントンボ、コサナエ、カトリヤンマ、ハラビロトンボ、チョウトンボ、マイコアカネ、クマコオロギ、ヒメコオロギ、タンボコオロギ、マツムシ、クツワムシ、カヤキリ、イナゴモドキ、ハルゼミ、イトアメンボ、タイコウチ、ミゾナシミズムシ、ズイムシ、ハナカメムシ、エリザハンミョウ、ニワハンミョウ、ヒラタマルゴミムシ、アシミゾヒメヒラタゴミムシ、キアシマルガタゴミムシ、アカガネアオゴミムシ、コアトワアオゴミムシ、ムナビロアオゴミムシ、ツヤキベリアオゴミムシ、ニセトックリゴミムシ、マルチビゲンゴロウ、コシマチビゲンゴロウ、シジミガムシ、チャムネハラホソハネカクシ、クシヒゲハネカクシ、ミヤマクワガタ、マエカドコエンマコガネ、ヒゲコガネ、ハンノヒメコガネ、ヒメトラハナムグリ、ハナムグリ、ウバタマムシ、ウバタマコメツキ、ヘイケボタル、ツヤケシハナカミキリ、フタコブルリハナカミキリ、ミドリカミキリ、クロトラカミキリ、シロスジカミキリ、オオアオゾウムシ、ホシアシブトハバチ、オオセイボウ本土亜種、ヤマトアシナガバチ、ルリモンハナバチ、クロマルハナバチ、ミカドガガンボ、クロベッコウハナアブ、ホソバセセリ、ウラギンスジヒョウモン、ヒョウモンチョウ本州中部亜種、オオムラサキ、ウラナミジヤノメ本土亜種、スキバホウジャク、コシロシタバ
魚類	現地調査で確認された種 (4 種)	アブラハヤ、ドジョウ、ホトケドジョウ、メダカ南日本集団
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種 (7 種)	スナヤツメ類、ニホンウナギ、キンブナ、カマツカ、シマドジョウ、ギバチ、ナマズ
底生動物	現地調査で確認された種 (4 種)	モノアラガイ、スジエビ、サワガニ、モクズガニ
	文献調査において改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査で確認されなかった種 (0 種)	—

カ. 影響予測の手順

影響予測は図 8-4-1-2 に示す手順に基づき行った。

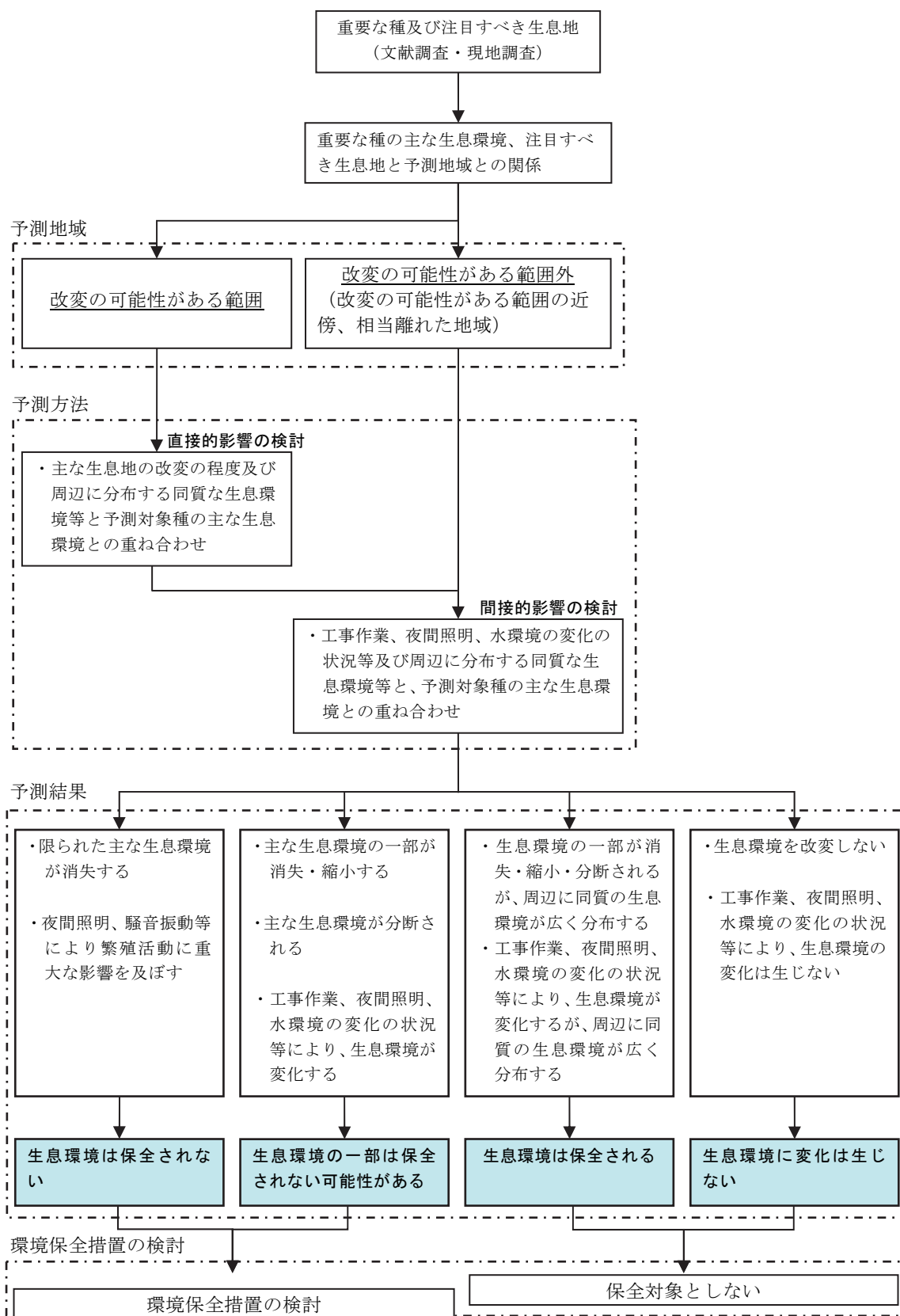


図 8-4-1-2 影響予測の手順

「予測の手順」は予測の考え方を分かりやすく表現するために作成したものであり、予測は個別の種ごとに実施した。詳細は個別の種ごとの予測結果を参照のこと。

キ. 予測結果

現地調査により確認されている重要な種は、工事の実施及び鉄道施設の存在によりその生息地及び生息環境が改変される程度について予測した。なお、文献調査により改変区域周辺に生息するとされている重要な種の内、現地調査で確認されなかった種は、対象事業の実施によりその種の生息環境が改変される程度を予測した。なお、魚類や底生動物等の移動範囲に関する知見は限られているが、個別の種ごとの一般生態、確認地点の生息環境を踏まえて、予測評価を実施した。

7) 現地調査で確認された重要な種に対する予測結果

現地調査で確認された重要な種の予測結果の概要は表 8-4-1-28 に示すとおりである。

表 8-4-1-28(1) 現地調査で確認された重要な種の予測結果の概要

分類	番号	種名	確認種の生息環境	確認位置		生息環境への影響
				改変の可能性 がある 範囲	改変の 可能性 がある 範囲外	
哺乳類	1	ホンドザル	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	2	ニッコウムササビ	植林地、落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	3	ホンシュウカヤネズミ	草地（オギ群集）	○		生息環境の一部は保全されない可能性がある
鳥類	1	キジ	耕作地、草地	○	○	生息環境は保全される
	2	カイツブリ	河川、池		○	生息環境に変化は生じない
	3	アオバト	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	4	ダイサギ	河川		○	生息環境に変化は生じない
	5	コサギ	河川		○	生息環境に変化は生じない
	6	バン	河川、池		○	生息環境に変化は生じない
	7	オオバン	河川、池		○	生息環境に変化は生じない
	8	ホトトギス	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	9	イソシギ	河川		○	生息環境に変化は生じない
	10	ミサゴ	(生息環境は分布しない)		○	生息環境に変化は生じない
	11	ハチクマ	(生息環境は分布しない)		○	生息環境に変化は生じない
	12	トビ	市街地、落葉広葉樹林、耕作地	○	○	生息環境は保全される
	13	ツミ	落葉広葉樹林	○	○	生息環境は保全される
	14	ハイタカ	落葉広葉樹林	○	○	生息環境は保全される

表 8-4-1-28(2) 現地調査で確認された重要な種の予測結果の概要

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		生息環境への影響
				変更の 可能性 がある 範囲	変更の 可能性 がある 範囲外	
鳥類	15	オオタカ	落葉広葉樹林、耕作地	○	○	生息環境は保全される
	16	サシバ	落葉広葉樹林、耕作地	○	○	生息環境は保全される
	17	ノスリ	落葉広葉樹林、耕作地	○	○	生息環境は保全される
	18	フクロウ	落葉広葉樹林	○	○	生息環境は保全される
	19	カワセミ	河川	○	○	生息環境に変化は生じない
	20	アカゲラ	落葉広葉樹林	○	○	生息環境は保全される
	21	アオゲラ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	22	チョウゲンボウ	耕作地	○	○	生息環境は保全される
	23	チゴハヤブサ	(生息環境は分布しない)		○	生息環境に変化は生じない
	24	ハヤブサ	草地、耕作地		○	生息環境は保全される
	25	サンコウチョウ	植林地		○	生息環境に変化は生じない
	26	モズ	耕作地、果樹園・桑園・茶畑、市街地	○	○	生息環境は保全される
	27	キクイタダキ	落葉広葉樹林、植林地	○	○	生息環境は保全される
	28	ヒバリ	耕作地		○	生息環境は保全される
	29	ツバメ	市街地、耕作地	○	○	生息環境は保全される
	30	ウグイス	落葉広葉樹林、竹林	○	○	生息環境は保全される
	31	メボソムシクイ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	32	センダイムシクイ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	33	ゴジュウカラ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	34	コサメビタキ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
35	オオルリ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される	
36	キセキレイ	河川		○	生息環境に変化は生じない	
37	セグロセキレイ	耕作地、市街地	○	○	生息環境は保全される	

表 8-4-1-28(3) 現地調査で確認された重要な種の予測結果の概要

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		生息環境への影響
				変更の 可能性 がある 範囲	変更の 可能性 がある 範囲外	
鳥類	38	カワラヒワ	耕作地	○	○	生息環境は保全される
	39	ベニマシコ	耕作地		○	生息環境は保全される
	40	ウソ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	41	イカル	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	42	アオジ	落葉広葉樹林	○	○	生息環境は保全される
	43	クロジ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
爬虫類	1	ニホンスッポン	河川、池		○	生息環境に変化は生じない
	2	ニホンヤモリ	市街地、耕作地		○	生息環境は保全される
	3	ヒガシニホントカゲ	落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地		○	生息環境は保全される
	4	ニホンカナヘビ	草地、耕作地、緑の多い住宅地		○	生息環境は保全される
	5	アオダイショウ	落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地		○	生息環境は保全される
	6	シマヘビ	耕作地、草地、水田、緑の多い住宅地		○	生息環境は保全される
	7	ヒバカリ	耕作地、水田、草地、緑の多い住宅地		○	生息環境は保全される
	8	ヤマカガシ	水田、耕作地、落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
両生類	1	アカハライモリ	水田、水路、水たまり		○	生息環境に変化は生じない
	2	ニホンアマガエル	水田、池、耕作地、草地、落葉広葉樹林、植林地		○	生息環境は保全される
	3	ツチガエル	水路、水辺		○	生息環境に変化は生じない
	4	ニホンアカガエル	水田、水路、池、落葉広葉樹林、植林地		○	生息環境は保全される
	5	ヤマアカガエル	水田、水路、池、落葉広葉樹林、植林地		○	生息環境は保全される
	6	シュレーゲルアオガエル	水田、水路、水辺		○	生息環境に変化は生じない
昆虫類	1	ニホンカワトンボ	水田、小河川		○	生息環境に変化は生じない
	2	ヤマサナエ	水田、小河川		○	生息環境に変化は生じない
	3	コシボソヤンマ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	4	コヤマトンボ	小河川		○	生息環境に変化は生じない

表 8-4-1-28(4) 現地調査で確認された重要な種の予測結果の概要

分類	番号	種名	確認種の 生息環境	確認位置		生息環境への影響
				改変の 可能性 がある 範囲	改変の 可能性 がある 範囲外	
昆虫類	5	シオヤトンボ	湿性地		○	生息環境に変化は生じない
	6	ヒメアカネ	水田、小河川		○	生息環境に変化は生じない
	7	ケラ	耕作地		○	生息環境は保全される
	8	ヤチスズ	耕作地、草地		○	生息環境は保全される
	9	クマスズムシ	落葉広葉樹		○	生息環境は保全される
	10	オナガササキリ	草地、耕作地		○	生息環境は保全される
	11	クルマバッタ	耕作地、草地		○	生息環境は保全される
	12	ショウリョウバッ タモドキ	耕作地、草地		○	生息環境は保全される
	13	ミイデラゴミムシ	耕作地		○	生息環境は保全される
	14	コガムシ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	15	トゲアリ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
	16	モンズズメバチ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される
17	オオイシアブ	落葉広葉樹林		○	生息環境は保全される	
魚類	1	アブラハヤ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	2	ドジョウ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	3	ホトケドジョウ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	4	メダカ南日本集団	小河川		○	生息環境に変化は生じない
底生動物	1	モノアラガイ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	2	スジエビ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	3	サワガニ	小河川		○	生息環境に変化は生じない
	4	モクズガニ	小河川		○	生息環境に変化は生じない

1) 重要な動物種への影響

a) 重要な哺乳類

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な哺乳類の予測結果は、表 8-4-1-29 に示すとおりである。

表 8-4-1-29(1) 重要な哺乳類の予測結果

ホンダザル (オナガザル科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。関東地方以西は広く分布し、東北地方では分布地がまばらである。 常緑広葉樹林、落葉広葉樹林に生息する。 繁殖行為は秋から冬、出産は春から夏であるが、地域により変異があり、西日本では幅がある。通常 2~3 年に 1 回の割合で、一度に普通 1 頭、ごく稀に 2 頭の子を産む。 昼行性で、樹上及び地上で活動する。雑食性で、果実、種子、葉、芽、昆虫その他の小動物を食するが、量的には植物質が多い。	
確認状況	春季調査時に 1 地点 1 個体が確認された。当該地域は群れが生息する地域ではないため、群れに属さない「ハナレザル」と考えられる。 確認された 1 地点 1 個体は改変の可能性がある範囲の近傍であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-29(2) 重要な哺乳類の予測結果

ニッコウムササビ (リス科)		
一般生態	本州、四国、九州に分布する。 自然林、発達した二次林及び針葉樹植林等に生息し、低地から亜高山帯まで見られるが低地に多い。 繁殖は年 2 回行う。 ほぼ植物食で木の芽、葉、花、果実、種子を食する。夜行性で、樹上で活動する。 巣は大木の樹洞に作り、日中はその中で休息している。雌は平均約 1.0~1.5ha の互いに重複しない行動圏、雄は平均約 2.0~3.0ha の互いに重複する行動圏をもつ。	
確認状況	冬季調査時に 3 地点 3 個体が確認された。 確認された 3 地点 3 個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	植林地、落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である植林地、落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である植林地、落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-29(3) 重要な哺乳類の予測結果

ホンシュウカヤネズミ (ネズミ科)		
一般生態	<p>本州太平洋側では宮城県以南、日本海側では新潟県、石川県以南、九州及び四国等に分布する。</p> <p>低地から標高1,200mあたり(長野県下伊那、神奈川県金時山)まで広く生息する。低地の草地、水田、畑、休耕地、沼沢地等のイネ科・カヤツリグサ科の植物が密生し水気のあるところに多く生息する。</p> <p>繁殖期は大部分の地域では春と秋の年2回繁殖するが、稀に夏にも繁殖する。野外での食物調査はないが、飼育下の主な食物はヒエ・アワ・アサ・ヒマワリの種子、サツマイモ、煮干、バッタ類等である。水面を泳ぐ。冬季には地表の堆積物及び地下に坑道を掘り、畦道でも採集される。</p>	
確認状況	<p>夏季及び秋季調査時に合計3地点3個体が確認された。なお、いずれも生息個体ではなく、草地に作られた球巣を確認したものである。</p> <p>確認された3地点3個体は改変の可能性がある範囲であった。</p>	
確認地点の生息環境	草地(オギ群集)	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲において生息が確認され、主な生息環境である草地(オギ群集)は、一部が消失・縮小する。 ・したがって、生息環境の一部は保全されない可能性がある。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲において生息が確認され、主な生息環境である草地(オギ群集)は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

b) 重要な鳥類

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な鳥類の予測結果は、表 8-4-1-30 に示すとおりである。

表 8-4-1-30(1) 重要な鳥類の予測結果

キジ (キジ科)		
一般生態	日本列島の特産種で、本州から九州までの各地に留鳥として生息する。平地及び山地の草原、耕作地、雑木林、低木林、河原の草原に生息し、近縁のヤマドリよりも開けた環境を好む。比較的人間の活動の多い場所に生息する。繁殖期は4～7月。草原、低木林、耕作地周辺の草むらの中に巣を作る。地上にある植物の芽・葉・種子、動物では昆虫、クモ類、多足類、軟体動物等を食する。	
確認状況	春季、繁殖期及び夏季調査時に11例が確認された。その内、改変の可能性のある範囲で1例、改変の可能性のある範囲の近傍で8例、相当離れた地域で2例確認された。	
確認地点の生息環境	耕作地、草地、落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(2) 重要な鳥類の予測結果

カイツブリ (カイツブリ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の温帯・熱帯、サハラ砂漠を除くアフリカ大陸、フィリピン等に分布する。日本にはほぼ全国的に分布し、各地で普通に繁殖する。北海道と本州北部では夏鳥、本州中部以南では留鳥である。主に平野部の池、湖沼、堀、河川に生息し、秋・冬には川の下流域でも見られる。淡水域の湖沼、大小の池、ダム湖等で繁殖する。繁殖期は2～10月。ヨシ原の中及び水中に繁茂する水草の上に、たくさんの水草の葉及び茎を用いて浮き巣を作る。潜水して体長5～6cm ぐらいのフナ及びタナゴ等、魚類、水生の甲殻類、昆虫、軟体動物を食する。	
確認状況	春季、繁殖期、夏季及び秋季調査時に合計5例が確認された。確認された5例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	河川、池	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(3) 重要な鳥類の予測結果

アオバト (ハト科)	
一般生態	<p>繁殖分布は日本列島に限られ、冬は台湾、中国南部に渡る。北海道、本州、四国、九州で繁殖し、北海道では夏鳥、他は留鳥、薩南諸島、南西諸島には冬に現れる。本州中部以南に多い。</p> <p>山地帯の常緑広葉樹林、落葉広葉樹林に生息する。繁殖に関してはほとんど分かっていない。巣が見つかっているのは6月。地上1~6m ぐらいの樹木の枝の上に、小枝を集めて粗雑な巣を作る。</p> <p>樹上、特に小枝、葉が茂る樹冠部、林内及び林縁の地上で採食する。樹木、草の実・果実・種子等を食する。海岸の岩礁地にミネラルをとるために、海水を飲み集まる場所がある。</p>
確認状況	<p>春季調査時に1例が確認された。</p> <p>確認された1例は相当離れた地域であった。</p>
確認地点の生息環境	竹林
予測結果	<p>工事の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	<p>鉄道施設の存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(4) 重要な鳥類の予測結果

ダイサギ (サギ科)	
一般生態	<p>世界中の熱帯・温帯で繁殖する。日本では関東地方から九州までの各地で繁殖する。冬は大部分が南方に移動する。</p> <p>見通しの良い川、湖沼、干潟等で生息する。繁殖期は4~9月。他のサギ類とともに混生して集団繁殖することが多く、マツ林、雑木林、竹林等の樹上に営巣する。</p> <p>水の中をゆっくり歩いて魚類を捕食する。両生類、甲殻類の他ネズミ等の哺乳類も食する。</p>
確認状況	<p>春季及び冬季調査時に合計2例が確認された。</p> <p>その内、改変の可能性のある範囲の近傍で1例、相当離れた地域で1例確認された。</p>
確認地点の生息環境	河川
予測結果	<p>工事の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	<p>鉄道施設の存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(5) 重要な鳥類の予測結果

コサギ (サギ科)		
一般生態	アジア、オーストラリア大陸、アフリカ大陸の熱帯・温帯にかけて広く分布する。日本では夏鳥又は漂鳥で、本州から九州までの各地で数多く繁殖する。低地のみならず山地の水田、湖沼、河川等の水辺に多い。海岸の干潟でも採食する。繁殖期は4～9月。ゴイサギ、チュウサギ、ダイサギ等と混生して集団繁殖することが多く、マツ林、雑木林、竹林等の樹上に営巣する。川の浅瀬及び水田を歩いて、ドジョウ、フナ、ウグイ、オイカワ等の魚類、カエル、アメリカザリガニ等をくちばしではさみとる。	
確認状況	春季、秋季及び冬季調査時に合計3例が確認された。その内、改変の可能性のある範囲の近傍で2例、相当離れた地域で1例確認された。	
確認地点の生息環境	河川、市街地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(6) 重要な鳥類の予測結果

バン (クイナ科)		
一般生態	オーストラリア区を除く世界中の熱帯・温帯にかけて広く分布し、温帯のものは南方に渡って越冬する。日本では、北海道、本州北部で夏鳥、関東地方以南では留鳥として周年生息する。湖沼、河川、水田、ハス田等のヨシ及びガマが生育する湿地に生息する。干潟に姿を現すこともある。繁殖期は4～8月。アシ、マコモ、イ、ガマ等の草むら及び水田に枯草を積み上げて、皿形の巣を作る。水草の葉・茎・種子を食する他、水辺の昆虫、貝、甲殻類、オタマジャクシ及びミミズも採食する。	
確認状況	春季、繁殖期、夏季、秋季及び冬季調査時に合計15例が確認された。確認された15例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	河川、池	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(7) 重要な鳥類の予測結果

オオバン (クイナ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の亜寒帯以南、オーストラリア大陸で繁殖し、熱帯・亜熱帯に渡り越冬するものが多い。日本では主に本州中部以北、北海道で繁殖する。東北地方北部のものは、それより南に渡り越冬する。 湖沼、河川、水田、ハス田等のヨシ及びびガマが生育する湿地に生息する。繁殖期は4～8月。ヨシ原及び草むらの中の水面に、枯れ草を積み重ねて皿形の巣を作る。 水面を泳いだり潜水して水草の葉・茎・種子を食する他、昆虫、貝、甲殻類も採食する。	
確認状況	春季及び冬季調査時に合計2例が確認された。 確認された2例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	池	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(8) 重要な鳥類の予測結果

ホトトギス (カッコウ科)		
一般生態	ヒマラヤからウスリー、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬はインド、東南アジアで越冬する。日本には夏鳥として渡来し、北海道南部から九州までの各地域で繁殖する。 托卵習性を持ち、主な仮親はウグイスである。このため、生息環境もウグイスと一致して、低地から山地のササ藪のある林に生息する。産卵期は、仮親であるウグイスと一致する5～6月。 昆虫を主食とし、樹上で鱗翅類の幼虫を好んで食する。	
確認状況	繁殖期及び夏季調査時に合計14例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で7例、相当離れた地域で7例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(9) 重要な鳥類の予測結果

イソシギ (シギ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の中・高緯度地方に広く繁殖分布し、アフリカ大陸南部からインド、中国南部等で越冬する。日本には北海道、本州、四国、九州等に夏鳥として渡来して繁殖する。本州中部以南から沖縄県にかけて、かなりの個体数が越冬する。 繁殖地では河川、湖沼等の水辺に生息し、水田、畑地等にも採食に現れる。越冬地では河川の中流部から河口部で見られ、湖沼の水辺にも現れる。繁殖期は4～7月。巣は砂地に浅い窪みを掘り、枯れ草を敷いて皿形に作る。 水辺を歩いて、ユスリカ類及びトビケラ類等の水生昆虫の幼虫をついばんだりほじくり出して採食する。	
確認状況	冬季調査時に1例が確認された。 確認された1例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(10) 重要な鳥類の予測結果

ミサゴ (ミサゴ科)		
一般生態	北海道から沖縄にかけて分布する留鳥だが、冬に海が氷結する地域からは暖地に移動する。 海岸、大きな川、湖等に生息する。 ボラ、スズキ、イワシ等の魚類だけを捕食する。繁殖期は4～7月。岩棚等に流木、枯れ枝を積んで、かなり大きな皿形の巣を作る。	
確認状況	合計3例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	(落葉広葉樹林の上空) ※移動中の個体が当該地域を通過したものと考えられる。	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において移動中の個体が確認され、改変の可能性がある範囲は本種の主な生息環境ではなく、工事の実施による生息環境の変化は生じない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において移動中の個体が確認され、改変の可能性がある範囲は本種の主な生息環境ではなく、鉄道施設の存在による生息環境の変化は生じない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(11) 重要な鳥類の予測結果

ハチクマ (タカ科)		
一般生態	夏鳥として本州、佐渡島、北海道で繁殖し、東南アジアで越冬する。 1,500m以下の丘陵地及び低山の山林に生息する。 ハチの幼虫、蛹を好んで食し、ジハチ類を特に好む。繁殖期は5月下旬から9月。 低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣を作る。	
確認状況	合計7例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	(落葉広葉樹林の上空) ※移動中の個体が当該地域を通過したものと考えられる。	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において渡り途中の個体が確認され、改変の可能性がある範囲は本種の主な生息環境ではなく、工事の実施による生息環境の変化は生じない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において渡り途中の個体が確認され、改変の可能性がある範囲は本種の主な生息環境ではなく、鉄道施設の存在による生息環境の変化は生じない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(12) 重要な鳥類の予測結果

トビ (タカ科)		
一般生態	九州以北の各地に周年、生息・繁殖し、数も多い。 耕作地、海岸、市街地等に多く生息する。 死魚、小動物の死体等を食する。	
確認状況	合計109例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	市街地、落葉広葉樹林、耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である市街地、落葉広葉樹林、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用及び工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である市街地、落葉広葉樹林、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(13) 重要な鳥類の予測結果

ツミ (タカ科)		
一般生態	全国各地で繁殖し、暖地では留鳥として周年生息するが、積雪の多い寒地のものは暖地に移動して越冬する。 多くは平地から亜高山帯の林に生息する。近年では、市街地及びその周辺の林での繁殖例が増えている。 主にスズメ、ツバメ、セキレイ類、エナガ、ムクドリ等の小型鳥類を捕食する他、小型のネズミ及び昆虫も餌とする。産卵期は 4～5 月。針葉樹の枝に枯れ枝を積み重ねて皿形の巣を作る。	
確認状況	合計 99 例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲、その近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(14) 重要な鳥類の予測結果

ハイタカ (タカ科)		
一般生態	本州以北で繁殖する留鳥だが、少数は冬に暖地へ移動する。 平地から亜高山帯の林に生息する。秋と冬には海岸近くの耕作地及びヨシ原まで出てくることがある。 主にツグミぐらいまでの小鳥を狩るが、ネズミ及びリス、ヒミズ等を捕らえることもある。産卵期は 5 月。カラマツの枝を主材に、皿形の巣を作る。	
確認状況	合計 130 例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(15) 重要な鳥類の予測結果

オオタカ (タカ科)	
一般生態	<p>四国の一部、本州及び北海道の広い範囲で繁殖するが、繁殖記録は東日本で多く、西日本では少ない。留鳥として周年生息するが、秋から冬になると高地及び山地のものの一部は低地及び暖地に移動する。</p> <p>平地から亜高山帯（秋・冬は低山帯）の林、丘陵地のアカマツ林及びコナラとアカマツの混交林に生息し、しばし獲物を求めて耕作地、牧草地及び水辺等の開けた場所にも飛来する。</p> <p>ツグミ等の小鳥及び中型・大型の鳥、ネズミ、ウサギ等を餌にする。巣作りは早いものでは2月上旬に始まり、産卵期は4月～6月。営巣木は、幹の上部が大きく又状に枝分かれした太いアカマツが好まれ、枝を積み重ねて厚みのある皿状の巣を作る。</p>
確認状況	<p>合計724例が確認された。2ペアが確認され、1ペアの繁殖の成功が確認された。また、営巣地は、相当離れた地域で2地点確認された。</p> <p>その他、その外郭では一部推定も含め3ペアが確認された。</p>
確認地点の生息環境	<p>落葉広葉樹林、耕作地</p>
予測結果	<p>工事の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・Aペアは、営巣地が相当離れた地域で確認されており、最大行動圏の一部が改変の可能性がある範囲に含まれるが、その割合はわずかである。 ・工事の実施に伴い、改変の可能性がある範囲に含まれる最大行動圏の一部において、人の移動、車両の通行が増加する可能性があるが、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用する他、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。 ・Bペアは、営巣地が相当離れた地域で確認されており、最大行動圏の一部が改変の可能性がある範囲に含まれるが、その割合はわずかである。 ・工事の実施に伴い、改変の可能性がある範囲に含まれる最大行動圏の一部において、人の移動、車両の通行が増加する可能性があるが、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用する他、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	<p>鉄道施設の存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(16) 重要な鳥類の予測結果

サシバ (タカ科)		
一般生態	夏鳥として 3~4 月頃に渡来し、九州から青森県にかけて繁殖する。一部は西表島、宮古島で越冬する。 低山から丘陵の森林に生息し、周辺の水田等の開けた環境で狩りをする。 ヘビを好んで食する他、ネズミ、モグラ、小鳥、カエル、バッタ等の昆虫も捕食する。繁殖期は 4~7 月。森林、丘陵地の奥まった谷のマツ、スギの枝上に、枯れ枝を積み重ねて皿形の巣を作る。	
確認状況	合計 170 例が確認された。1 ペアが確認されたが、繁殖の成功は確認されなかった。また、営巣地は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用及び工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(17) 重要な鳥類の予測結果

ノスリ (タカ科)		
一般生態	北海道から四国で繁殖し、秋・冬には全国に分散する。 平地から亜高山帯の林に生息し、付近の荒地、河原、耕作地、干拓地で狩りをする。 小型哺乳類、カエル、ヘビ、昆虫、鳥等を捕食する。産卵期は 5~6 月。林内の大木の枝の叉に枯れ枝を積み重ねて皿形の巣を作る。	
確認状況	合計 180 例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(18) 重要な鳥類の予測結果

フクロウ (フクロウ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の中・高緯度地方に分布する。日本では北海道から本州、四国、九州にかけて見られる留鳥である。 低地、低山地から亜高山帯にかけて、いろいろなタイプの樹林に生息し、特に大きい樹木のある落葉広葉樹林及び針広混交林を好む。濃密に茂った針葉樹林でも見られる。繁殖期は3～5月頃。巣は、樹洞、カラスなど他種 of 古巣等を利用する。 夜行性で、林縁で下枝の少ない樹林等で採食する。ネズミ類、小哺乳類、鳥類等を食する。	
確認状況	春季及び繁殖期調査時に合計3例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲で1例、相当離れた地域で2例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・工事の実施に伴う夜間照明は、必要に応じて極力外部に向けないよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(19) 重要な鳥類の予測結果

カワセミ (カワセミ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の熱帯から亜寒帯まで分布する。日本では、北海道で夏鳥、本州以南では留鳥として全国に繁殖分布する。 全国の標高900mぐらいまでの河川、湖沼、湿地、小川、用水等の水辺に生息し、ときには海岸及び島嶼に生息することもある。繁殖期は3～8月。水辺の土質の崖に、くちばしを使って50～100cmぐらいの深さの巣穴を掘る。 水辺の杭及び水草、枝等に止まり、餌を見つけると水面に飛び込んで捕食する。餌は主に川魚で、その他にザリガニ、エビ、カエル等も食する。	
確認状況	春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計11例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲で2例、改変の可能性のある範囲の近傍で1例、相当離れた地域で8例確認された。	
確認地点の生息環境	河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(20) 重要な鳥類の予測結果

アカゲラ (キツツキ科)		
一般生態	ユーラシア大陸のヒマラヤ山地と中央部の砂漠及び草原地帯を除く森林に分布する。日本では北海道、本州の中部地方以北に多く、留鳥である。 いろいろなタイプの樹林に生息し、落葉広葉樹林、アカマツ林等の比較的明るい林を好む。繁殖期は5～7月。枯れ木、枯れた大枝に、雌雄共同で樹洞を掘って巣にする。 樹木の幹から大枝にかけてよじ登りながら、樹皮の表面、割れ目、特に枯死部で採食する。甲虫の幼虫、アリ類及び林鱗翅類の幼虫を食する。植物質では、ヌルデ及びウルシの実、ノイバラ及びヤマブドウ等の果実を食する。	
確認状況	冬季調査時3例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲で1例、改変の可能性がある範囲の近傍で1例、相当離れた地域で1例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(21) 重要な鳥類の予測結果

アオゲラ (キツツキ科)		
一般生態	日本列島の本州、四国、九州、屋久島、種子島等に限定されて分布する留鳥である。 常緑広葉樹林、モミ林、スギ林、ヒノキ林、マツ林、落葉広葉樹林、雑木林等いろいろなタイプの樹林に生息する。繁殖期は4～6月。巣は主に下枝のない生木の樹幹に樹洞を掘って作る。 樹幹を下から上へよじ登りながら採食する。昆虫、甲虫の幼虫・成虫、クモ、ムカデ等を食する。	
確認状況	春季、繁殖期、夏季、秋季及び冬季調査時に合計16例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で4例、相当離れた地域で12例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、混交林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(22) 重要な鳥類の予測結果

チョウゲンボウ (ハヤブサ科)		
一般生態	長野県、山梨県、栃木県、宮城県等で繁殖し、冬は日本各地に広がる。草原、灌木草原、耕作地、河川敷等の開けたところに生息し、低地から高山帯まで幅広く見られる。小型哺乳類及び小鳥を捕らえる。繁殖期は4～7月。巣は崖の洞穴及びカラス等の他の古巣に作る。	
確認状況	合計68例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(23) 重要な鳥類の予測結果

チゴハヤブサ (ハヤブサ科)		
一般生態	北海道と東北地方の北部で少数が繁殖する。一部は本州中部以南で越冬するが数は少ない。平地の疎林に生息し、周辺の高地、草原等の広い空間で狩りをする。ヒバリ、ツバメ、スズメ等の小型鳥類、コウモリ、トンボ、バッタ等も餌にする。産卵期は5～6月。巣は自分で作らず、カラス、ハイタカ、カケスの古巣を利用し、産座に小枝を敷いて産卵する。	
確認状況	合計2例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	(耕作地、落葉広葉樹林) ※移動中の個体が当該地域を通過したものと考えられる。	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において移動中の個体が確認され、改変の可能性がある範囲は本種の主な生息環境ではなく、工事の実施による生息環境の変化は生じない。 したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において移動中の個体が確認され、改変の可能性がある範囲は本種の主な生息環境ではなく、鉄道施設の存在による生息環境の変化は生じない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(24) 重要な鳥類の予測結果

ハヤブサ (ハヤブサ科)		
一般生態	北海道から九州北西部の島嶼に至るまで広く分布し、特に東北地方と北海道沿岸部に多い。 海岸、海岸に近い山の断崖、急斜面、広大な水面のある地域、広い草原、原野等に生息する。 獲物はほとんど中型の小鳥で、稀に地上でネズミ、ウサギを捕る。産卵期は3月下旬から4月上旬。海岸、海岸に近い山地の断崖の岩棚の窪みに営巣する。	
確認状況	合計7例が確認された。繁殖は確認されなかった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、市街地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である草地、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う騒音・振動は、必要に応じて低騒音・低振動型の建設機械等の使用、工事施工ヤード区域外への人及び車両の進入を極力避けるよう配慮することにより、生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である草地、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(25) 重要な鳥類の予測結果

サンコウチョウ (カササギヒタキ科)		
一般生態	日本、台湾、フィリピンで繁殖する。日本には夏鳥として5月ごろ渡来し、本州から屋久島までの各地で普通に繁殖する。越冬地は東南アジア各地である。 平地から標高1,000m以下の山地の暗い林に生息する。沢沿いの谷及び傾斜のある山地に多く、スギ及びヒノキの人工林、雑木林及び落葉広葉樹林の密林に営巣する。繁殖期は5～8月。巣は周りに葉のない枝の2又か3又の部分に、スギの皮及びアカマツの葉及びコケ類等をクモの糸でからませて円錐を逆さにした形に作る。 飛翔する昆虫をフライングキャッチ法で捕獲し、再び元の止まり木にもどる。	
確認状況	夏季調査時に2例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で1例、相当離れた地域で1例確認された。	
確認地点の生息環境	植林地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である植林地は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である植林地は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(26) 重要な鳥類の予測結果

モズ (モズ科)		
一般生態	サハリン、沿海州南部から中国北部、朝鮮半島、日本で繁殖する。日本では全国各地に留鳥として周年生息する。 集落、耕作地の周辺、河原、自然公園、高原、林縁等の低木のある開けた環境であれば、至るところで繁殖する。繁殖期は2月下旬から7月。低木の藪の中に、小枝、枯れ草、ビニールの紐等を用いて椀形の巣を作る。 昆虫及びミミズから、カエル及びヘビといった両生・爬虫類、鳥類、モグラ及びネズミ等の小哺乳類も食する。秋から冬にかけて捕えた獲物を、鉄条網及び木の刺、小枝に串刺しにしておく早贄の習性がある。	
確認状況	春季、秋季及び冬季調査時に合計 29 例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲で 2 例、改変の可能性のある範囲の近傍で 13 例、相当離れた地域で 14 例確認された。	
確認地点の生息環境	耕作地、果樹園・桑園・茶畑、市街地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、果樹園・桑園・茶畑、市街地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、果樹園・桑園・茶畑、市街地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(27) 重要な鳥類の予測結果

キクイタダキ (キクイタダキ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の中・高地度地方に、中央の砂漠地帯をとり巻くように分布する。日本では北海道と本州の中部以北で繁殖し、冬は各地に訪れる。 亜寒帯針葉樹林、亜高山針葉樹林で繁殖し、特にトウヒ属、モミ属の樹林を好む。冬は低地及び低山帯のマツ林、スギ林等の針葉樹林で見られ、特にスギ林を好む。繁殖期は6～8月。巣は、針葉樹の樹冠部の小枝の間にハンモック状に吊るした椀形で、外装には地衣類及び蘚類、ダケカンバの樹皮等を、内装には獣毛及びシダ類の仮根を使う。 針葉樹の上層部外側の樹冠部を中心に採食する。樹冠部の針葉の間を渡り歩き、小枝及び葉にいる虫に飛びついて捕える。	
確認状況	冬季調査時に 2 例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲で 1 例、相当離れた地域で 1 例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、植林地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、植林地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、植林地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(28) 重要な鳥類の予測結果

ヒバリ (ヒバリ科)		
一般生態	北アフリカの一部、ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯に分布する。日本では、九州以北から北海道までの全国で繁殖する。積雪の多い地方では冬に南下して越冬し、留鳥あるいは漂鳥として生息する。 牧場、草原、河原、耕作地、埋立て地に生息するが、丈の低い草が疎らに生え、露出した地面の多い乾燥地を好む。2月下旬頃から徐々に繁殖地に渡来し、繁殖期は4月下旬から7月。椀形の巣を草の根元に作る。 地上で餌をあさり、草の実及び昆虫をついばむ。非繁殖期には河原の土手等、乾燥した場所で草の実を食する。	
確認状況	繁殖期調査時に2例が確認された。 確認された2例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(29) 重要な鳥類の予測結果

ツバメ (ツバメ科)		
一般生態	北半球の温帯・亜寒帯で繁殖し、熱帯に渡って越冬する。日本では、種子島以北の全土に夏鳥として渡来する。 山間の村落、町、市街地に多く、田畑、草原、庭園、公園、海岸、河川等、営巣地付近のあらゆる環境を飛翔して採食地とする。産卵期は4~7月。人家又は建築物の軒下に営巣する。 空中を飛びながら、飛翔するハチ、ハエ、アブ、トンボといった昆虫を単独で捕食する。斜面の上方等、空中に虫が上昇気流で集まるところでは群がる。	
確認状況	春季、繁殖期及び夏季調査時に合計25例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲で2例、改変の可能性がある範囲の近傍で8例、相当離れた地域で15例確認された。	
確認地点の生息環境	市街地、耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である市街地、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である市街地、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(30) 重要な鳥類の予測結果

ウグイス (ウグイス科)		
一般生態	主に日本海をとり巻く地域で繁殖する。日本では全国各地に広く分布する。冬は低地又は暖地に漂行する。 平地から亜高山のササ藪を伴う低木林、林縁等に生息し、秋・冬には平地の藪の中で生活する。繁殖地は低山帯から標高 2,000m ぐらいの亜高山帯まで幅広い垂直分布をもつが、林床にササが密生していることが条件である。繁殖期は 4~8 月。ハイイヌツゲ、ノリウツギ、ササ等の枝に、ササ、ススキの葉を用いて、横に出入り口のある球状の巣を作る。 藪の中を枝渡りしながら、葉の裏面につく昆虫を下から飛びつくように襲う。冬は熟したリンゴ、カキ等の果実を食する。	
確認状況	春季、繁殖期、夏季、秋季及び冬季調査時に合計 72 例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲で 4 例、改変の可能性がある範囲の近傍で 24 例、相当離れた地域で 44 例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、竹林、高茎草地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、竹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、竹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(31) 重要な鳥類の予測結果

メボソムシクイ (ムシクイ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の高緯度地方のタイガベルト地帯で繁殖し、東南アジアに渡って冬を越す。日本では北海道、本州、四国に夏鳥として渡来して繁殖する。渡り期には各地で見られる。 繁殖地は亜高山針葉樹林及び森林限界のダケカンバ林、日本海側ではブナ帯の上部で見られる。渡り期には低地、低山帯のマツ林及び雑木林等で見られる。繁殖期は 6~8 月。巣は地上に作る事が多く、蘚類が茂る窪み及び樹木の根の間等、うまく隠れた部分に置く。 樹木の下枝から下枝へ移り伝わりながら葉及び枝の下側に飛びついて、周辺を飛んでいる虫及び止まっている虫をくわえとる。	
確認状況	秋季調査時に 1 例が確認された。 確認された 1 例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(32) 重要な鳥類の予測結果

センダイムシクイ (ムシクイ科)		
一般生態	ウスリーから朝鮮半島及び日本にかけて繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では夏鳥として渡来し、北海道から九州までの各地で繁殖する。 主に低山帯の落葉広葉樹林に生息し、特に林床に低木及び藪の多いところを好む。渡りの時期には平野部でも見られる。産卵期は 5～6 月。草の根元及び崖の窪みに、枯れ葉、樹皮、イネ科の茎、コケ類等で、横に出入り口のある球状の巣を作る。 樹上で餌を求めることが多く、葉及び枝についている昆虫を捕える。鞘翅類、膜翅類、双翅類等の昆虫の幼虫・成虫を主食にする。	
確認状況	春季調査時に 4 例が確認された。 確認された 4 例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(33) 重要な鳥類の予測結果

ゴジュウカラ (ゴジュウカラ科)		
一般生態	ユーラシア大陸に広く分布し、日本では、北海道、本州、四国、九州に留鳥である。 低山帯上部から亜高山帯にかけての森林(落葉広葉樹林、亜高山針葉樹林、針広混交林)に生息する。大きい樹木の多い森林、枯死木のある森林を好み、自然林、原生林に多い。繁殖期は 4～7 月。巣は樹洞、キツツキの古巣等を作る。 森林内の樹木の幹、大枝で採食する。昆虫、クモ類等を食するが、秋には樹木の種子、果実も食する。特に針葉樹、ブナ等の種子を貯える習性がある。	
確認状況	冬季調査時に 1 例が確認された。 確認された 1 例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(34) 重要な鳥類の予測結果

コサメビタキ (ヒタキ科)		
一般生態	ヒマラヤ、シベリア南部から中国東北部及び朝鮮半島等で繁殖し、インドから中国南部、ボルネオ島等に渡って越冬する。日本には夏鳥として4月ごろ渡来し、北海道から九州までの全国各地で繁殖する。 平地から標高1,000mぐらいまでの落葉広葉樹林、雑木林、カラマツ林に生息し、密生した林より明るい林を好む。繁殖期は5~7月。高木の葉がない水平な枝の上に樹皮等で椀形の巣を作る。 木の枝にじっと止まり、空中を飛ぶチョウ、ガ、ウンカ、アブ等の昆虫をフライングキャッチ法で捕獲する。	
確認状況	秋季調査時に2例が確認された。 確認された2例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(35) 重要な鳥類の予測結果

オオルリ (ヒタキ科)		
一般生態	中国東北部、ウスリー、朝鮮半島及び日本で繁殖し、インドシナ半島から大スンダ列島、フィリピン等に渡って越冬する。日本には夏鳥として4月下旬ごろ渡来し、南西諸島を除く北海道から九州までの全国各地で繁殖する。 主として低山帯から亜高山帯にかけての山地及び丘陵に生息し、特に溪流沿いのよく茂った林に多い。繁殖期は5~8月。崖地、溪流近くの落葉広葉樹林内の岩又は土の崖地に営巣する。 枝先から谷間の上空に飛び出し、フライングキャッチ法で空中を飛ぶチョウ、ガ、ウンカ、アブ、羽化した水生昆虫等を捕える。	
確認状況	春季調査時に1例が確認された。 確認された1例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(36) 重要な鳥類の予測結果

キセキレイ (セキレイ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の中緯度地方とアフリカ大陸南部に分布する。日本では北海道、本州、四国、九州と周辺の島々で繁殖し、冬は本州以南、琉球諸島にかけて越冬する。各地に留鳥又は漂鳥として普通に見られる。 低地、低山地に多く、亜高山帯から高山帯にまで現れる。小さな水路から大きい川まで水辺をすみかにし、特に山麓及び山間の溪流、あるいは清流の多い集落に好んですみつく。繁殖期は4～8月。巣は崖の窪み及び樹木の幹に近い枝の上に作る。 地上及び水辺を歩きながら、昆虫類、特に双翅類、脈翅類、カゲロウ類、カワゲラ類、トビケラ類等をよく食する。	
確認状況	繁殖期、夏季、秋季及び冬季調査時に合計5例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で2例、相当離れた地域で3例確認された。	
確認地点の生息環境	河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(37) 重要な鳥類の予測結果

セグロセキレイ (セキレイ科)		
一般生態	日本列島だけに分布する固有種で、北海道、本州、四国、九州で留鳥として繁殖し、対馬、伊豆諸島、奄美大島には冬鳥として現れる。 低地、低山帯、ときには亜高山帯の河川とその周辺に生息する。河原のある河川に生息し、河原のない溪流及び峡谷では見られない。繁殖期は3～7月。巣は川の土手の窪み、河原の石、流木の下、人家の石垣、屋根及び河原の隙間等を作る。ほとんど昆虫食で、トビケラ類、カワゲラ類、カゲロウ類、双翅類等の幼虫・成虫を食し、ときには柾等の種子も食する。	
確認状況	春季、繁殖期、夏季、秋季及び冬季調査時に合計11例が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲で2例、改変の可能性がある範囲の近傍で4例、相当離れた地域で5例確認された。	
確認地点の生息環境	耕作地、市街地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、市街地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、市街地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(38) 重要な鳥類の予測結果

カワラヒワ (アトリ科)		
一般生態	中国、ウスリー・アムール川流域、モンゴル、朝鮮半島、日本等に分布する。日本では、北海道から九州までの全域に分布する。主に留鳥として周年生息するが、北海道及び雪の多い地方では夏鳥で、冬は温暖な地方に移動する。 人家周辺、耕作地、雑木林、河原に生息する。繁殖期には、平地から低山帯のいろいろな林で見られるが、針葉樹林を好む。繁殖期は3～7月。巣はスギ、ヒノキ、マツ、サワラ、モミ等の樹木に作る。非繁殖期には主な生息地を河原に移す。四季を通して、キク科、イネ科、タデ科、マメ科等の植物の種子だけを食する。	
確認状況	春季、繁殖期、夏季、秋季及び冬季調査時に合計8例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲で1例、改変の可能性のある範囲の近傍で3例、相当離れた地域で4例確認された。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(39) 重要な鳥類の予測結果

ベニマシコ (アトリ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の中緯度地方の東半分分布する。日本では北海道と本州の北端の下北半島で夏鳥として繁殖する。本州以南では冬鳥である。 低山帯の林縁、疎林、耕作地、川辺等の藪の多いところで見られる。繁殖期は5～7月。巣は地上80～170cmくらいの低木、藪の小枝に乗せるように、枯れ草、樹皮、細根等で椀形に作る。 昆虫、果実、種子、木の芽等を食する。	
確認状況	冬季調査時に2例で確認された。 確認された2例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(40) 重要な鳥類の予測結果

ウソ (アトリ科)		
一般生態	ユーラシア大陸の亜寒帯で繁殖する。日本では本州中部以北の亜高山針葉樹林帯から北海道にかけて繁殖するが、四国と九州の山地でも繁殖期の観察例がある。本州中部では、亜高山帯で繁殖するが、緯度が高くなるにつれて繁殖地の標高は低くなり、北海道東部及び北部では平地のエゾマツ林でも繁殖する。冬は標高の低い山地、丘陵地、市街地の公園等に移動する。 繁殖期は5～8月。亜高山帯の針葉樹の地上から高さ1～3mぐらいのところに枯れ草、サルオガセ等で椀形の巣を作る。 樹上でモモ、サクラ、ウメといった植物のつぼみ・若芽をついばむ。雛には、昆虫、植物の種子・つぼみを与える。	
確認状況	冬季調査時に10例が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で8例、相当離れた地域で2例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(41) 重要な鳥類の予測結果

イカル (アトリ科)		
一般生態	中国東北部、ウスリー、朝鮮半島、日本に分布し、冬はやや南下して越冬するものが多い。日本では九州から北海道まで広い分布域をもち、山地の広葉樹林に多い。 繁殖期は5～7月。巣は広葉樹の高さ5～7mぐらいの枝上に、小枝、枯れ草、コケ類を用いて椀形の巣を作る。 非繁殖期には大きなくちばしで樹上あるいは地上に落ちたヌルデ、ハゼ、サクラ、カエデ等の木の実及び種子を食する。マメ科のさや、ヒマワリの種子等をくちばしにはさんで巧妙に割ることができる。繁殖期には昆虫も食する。	
確認状況	秋季調査時に2例で確認された。 確認された2例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(42) 重要な鳥類の予測結果

アオジ (ホオジロ科)		
一般生態	ユーラシア大陸東部のバイカルからウスリーを経て、日本列島、中国中央部に分布する。日本では本州の中部以北、北海道で繁殖する。冬は本州西南部、四国、九州から台湾、中国南部で過ごす。 山地帯上部から亜高山下部にかけての比較的明るい林に生息し、疎林で藪が多いところ、林縁、若木林等を好む。繁殖期は5～7月。巣は地上1～2mぐらいの藪の中の枝の又上に乗せるように作る。越冬地では常緑樹林の林縁、人家の生垣、竹林、溝、河川の堤防沿いの藪、ヨシ原等で見られる。 タデ科、イネ科等の種子、ズミ、イボタノキ等の果実の他、夏には昆虫の幼虫・成虫も食する。	
確認状況	春季及び冬季調査時に合計8例で確認された。 その内、改変の可能性のある範囲で1例、改変の可能性のある範囲の近傍で2例、相当離れた地域で5例確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲とその近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-30(43) 重要な鳥類の予測結果

クロジ (ホオジロ科)		
一般生態	カムチャッカ半島南部から日本列島までに限られて分布し、日本では本州中部以北と北海道で繁殖する。本州では日本海側の山地に分布が偏っている。冬は本州西南部から南西諸島に渡って過ごす。 低山帯上部から亜高山帯下部にかけての落葉広葉樹林、針広混交林、針葉樹林に生息する。原生林及び二次林にいるが、樹林に覆われたササ藪が密生しているところを好む。繁殖期は5～8月。巣は、地上1～2mぐらいの藪の中及びササの稈の重なり等の上に乗せるように作る。越冬地では常緑樹林及びスギ林に潜み、林縁に出てくる。 藪、特にササ藪の下の地上で採食する。タデ科、イネ科等の草の種子の他、残雪の上でトビムシをついばむこともある。	
確認状況	冬季調査時に1例が確認された。 確認された1例は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

c) 重要な爬虫類

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な爬虫類の予測結果は、表 8-4-1-31 に示すとおりである。

表 8-4-1-31(1) 重要な爬虫類の予測結果

ニホンスッポン (スッポン科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。 主に河川の中流から下流にかけて、平地の池沼等の砂泥質の場所に生息する。 春先の4~6月に繁殖行為を行い、6~8月に産卵する。 肉食性で魚類、貝類、甲殻類、水生昆虫等さまざまな小動物を食する。日光浴も行い、川等では中州に上陸している姿を見かける。古くから養殖されてきたため人為的な移殖が多く、また海外からの移入も少なくないために交雑が進んでいる可能性がある。	
確認状況	夏季及び秋季調査時に合計2地点3個体が確認された。 確認された2地点3個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	河川、池	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である河川、池は、改変されない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(2) 重要な爬虫類の予測結果

ニホンヤモリ (ヤモリ科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。 民家及び寺院等の建物でよく見かける。都市部のマンションにもいる。 5月上旬から8月上旬、戸袋、壁の隙間、天井裏等に2~3個、年に1~2回産卵する。産卵直後の卵塊は柔らかく粘り気があり、壁及び柱に付着してそのまま固まる。 昼間は姿を隠しているが、夜間、灯火の周辺に出現し、集光性の昆虫及びクモ等を食する。春先には昼間で日光浴をしていることもある。	
確認状況	春季、夏季及び秋季調査時に合計21地点64個体が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で3地点5個体、相当離れた地域で18地点59個体確認された。	
確認地点の生息環境	市街地、耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である市街地、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である市街地、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(3) 重要な爬虫類の予測結果

ヒガシニホントカゲ (トカゲ科)		
一般生態	伊豆半島を除く本州東部、北海道の各地と周辺の島に分布する。 庭、畑、道路脇の斜面、林縁部、石垣及び山道に生息する。 繁殖行為は 4～5 月、雄にはオレンジ色の婚姻色が現れる。5 月下旬から 6 月上旬、石の下及び土手の斜面の巣穴に鶏卵型の卵を 5～16 個産む。 ミミズ、クモ、ワラジムシ、コオロギを主に食する。	
確認状況	春季、夏季及び秋季調査時に合計 11 地点 15 個体が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で 3 地点 4 個体、相当離れた地域で 8 地点 11 個体確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林、耕作地、林縁、低茎草地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(4) 重要な爬虫類の予測結果

ニホンカナヘビ (カナヘビ科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州等に分布する。 平地から低山地の藪、草地、庭先等に生息する。 繁殖期は 3～9 月。繁殖行為は春先から始まる。 主に昆虫及びクモを食する。夜は草の上及び落葉の下で休む。	
確認状況	春季、夏季及び秋季調査時に合計 9 地点 10 個体が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で 3 地点 3 個体、相当離れた地域で 6 地点 7 個体確認された。	
確認地点の生息環境	低茎草地、耕作地、道路脇、水田	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である草地、耕作地、緑の多い住宅地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である草地、耕作地、緑の多い住宅地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(5) 重要な爬虫類の予測結果

アオダイショウ (ナミヘビ科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州等に分布する。 山地の森林から平野部の人家まで、さまざまな環境に生息する。 5～6月に繁殖行為を行う。 成蛇は主にネズミを食する。地上より樹上で見つかることが多く、鳥及び鳥の卵も好むようである。幼体は食性が広く、カエル及びトカゲ等も食し、水田等で見かけることも多い。	
確認状況	春季及び夏季調査時に合計2地点2個体が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で1地点1個体、相当離れた地域で1地点1個体確認された。	
確認地点の生息環境	湿性地、路上	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林、耕作地、緑の多い住宅地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(6) 重要な爬虫類の予測結果

シマヘビ (ナミヘビ科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州等に分布する。 開けた平地から山地、水田、山道、草原、畑、民家等で普通に目にする。日の当たる石垣及び草原、道路脇等では特に目にする機会が多い。 4～6月に繁殖行為を行う。 主に地表で活動し、昼間にカエルをはじめ、トカゲ、ネズミ、ヘビ等、さまざまな動物を捕らえて食する。	
確認状況	春季、夏季及び秋季調査時に合計4地点4個体が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で3地点3個体、相当離れた地域で1地点1個体確認された。	
確認地点の生息環境	耕作地、低茎草地、民家、法面	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地、水田、緑の多い住宅地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地、水田、緑の多い住宅地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(7) 重要な爬虫類の予測結果

ヒバカリ (ナミヘビ科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州等に分布する。 森林から平地まで幅広い環境に生息するが、特に水田及び湿地等に多い。 5～6月に繁殖行為を行い、産卵は初夏に行われる。 カエル成体及び幼生、ドジョウ等の小魚、ミミズ等を食する。	
確認状況	春季及び秋季調査時に合計3地点3個体が確認された。 確認された3地点3個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	低茎草地、路上	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、水田、草地、緑の多い住宅地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、水田、草地、緑の多い住宅地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-31(8) 重要な爬虫類の予測結果

ヤマカガシ (ナミヘビ科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。 平地の水田、小川、湿地等に多く、山地から平地まで生息、最も普通に見られる。 産卵は6～8月である。 カエル類を主に食しているが、カエルの幼生、ドジョウ等の小魚、大型の個体ではヒキガエルのような大きなカエルも食する。 動きは敏捷でよく水に入り、主に昼間に活動している。	
確認状況	春季、夏季調及び秋季調査時に合計3地点3個体が確認された。 確認された3地点3個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	水田、落葉広葉樹林、池	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、耕作地、落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> 本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、耕作地、落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 したがって、生息環境に変化は生じない。

d) 重要な両生類

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な両生類の予測結果は、表 8-4-1-32 に示すとおりである。

表 8-4-1-32(1) 重要な両生類の予測結果

アカハライモリ (イモリ科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。 池・水田・湿地等の水中に多い。林道の側溝等でも見られる。基本的に流れのある川には生息しないが、大きな川でも川岸のたまり水で見ることがある。 春から初夏にかけて、水中の草、枯れ葉等に1卵ずつ産卵する。粘着性のある卵を葉の間に産卵、付着させる。ふ化した幼生はバランサーをもっている。 非常に貪食で、動物質なら種類は選ばず食する。 なお、竹内ら(2008)によると、再捕獲した41個体の平均移動距離は17.23mである。また、小林ら(2009)によると、再捕獲した個体の内、最も遠くまで移動したものは45mである。	
確認状況	早春季、春季、夏季及び秋季調査時に合計5地点12個体が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で1地点2個体、相当離れた地域で4地点10個体確認された。	
確認地点の生息環境	水田、水路、水たまり	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、水たまりは、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、水たまりは、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-32(2) 重要な両生類の予測結果

ニホンアマガエル (アマガエル科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州等に分布する。 海岸付近から高山帯、市街地から草原まで生息している。吸盤が発達しており、地上から草木の上までと活動場所は多様である。 繁殖期は3~9月と地域、環境により異なる。産卵には、水田、沼、湿地、雨後の水たまり等の止水が利用される。	
確認状況	早春季、春季、夏季及び秋季調査時に合計13地点100個体以上が確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で6地点100個体以上、相当離れた地域で7地点100個体以上確認された。	
確認地点の生息環境	水田、池、耕作地、草地、落葉広葉樹林、混交林、竹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、池、耕作地、草地、落葉広葉樹林、植林地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、池、耕作地、草地、落葉広葉樹林、植林地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-32(3) 重要な両生類の予測結果

ツチガエル (アカガエル科)		
一般生態	北海道西部、本州、四国、九州等に分布する。 海水がかかる水溜まり、水田、湿地、河川、山間部の溪流等の水辺周辺に生息する。 繁殖期は5～9月で、雌は水草及び水中の枝等に小さな卵塊をいくつも産み付ける。海岸近くでは海水が流入するような水溜まりで産卵することもある。幼生の一部はその年の秋までに変態するが、越冬し翌年変態する個体もいる。成体は泥の中で越冬する。	
確認状況	早春季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	水路	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水路、水辺は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水路、水辺は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-32(4) 重要な両生類の予測結果

ニホンアカガエル (アカガエル科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。本州中部の一部には分布しない地域がある。平地、丘陵地の水田、湿地、林床等に生息し、山間部には少ない。 繁殖は地域により差があるが1～5月に行われる。水田を産卵場所にすることが多い。平地で普通に見られる。本州のカエルでは産卵が一番早く始まり、12月から産卵する地域もある。冬季に繁殖に出てきた個体は、産卵終了後、休眠に入る。 なお、大澤ら(2001)によると、本種の移動距離は、平均113～145mで最大469mである。	
確認状況	早春季、春季、夏季及び秋季調査時に合計11地点100個体以上が確認された。 確認された11地点100個体以上は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	水田、水路、池、湿性地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、池、落葉広葉樹林、植林地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、池、落葉広葉樹林、植林地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-32(5) 重要な両生類の予測結果

ヤマアカガエル (アカガエル科)		
一般生態	本州、四国、九州、佐渡島に分布する。 平地から丘陵地の水田、湿地、山間部の比較的高地まで生息する。 分布域が広い繁殖期間には幅がある。2～6月に水田、溪流部の止水、池、沼、湿地等の浅い部分で産卵が行われる。 なお、大澤ら(2001)によると、本種の移動距離は、平均187～204mで最大559mである。	
確認状況	早春季、春季、夏季及び秋季調査地に合計18地点100個体以上が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で1地点4個体、相当離れた地域で17地点100個体以上確認された。	
確認地点の生息環境	水田、水路、池、水たまり、湿性地、低茎草地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、池、落葉広葉樹林、植林地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、池、落葉広葉樹林、植林地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-32(6) 重要な両生類の予測結果

シュレーゲルアオガエル (アオガエル科)		
一般生態	本州、四国、九州等に分布する。 水田、丘陵部から高山部まで生息している。 繁殖期は生息環境で異なり、2～8月、普通は4～6月である。水田の畦、池、沼の周辺の土中に白い泡状の卵塊を産み付ける。岩の割れ目、水辺の草の上に産卵する場合もある。鳴き声が聞こえても、地中、草陰、石の隙間等に隠れているため、姿は見えないことが多い。四肢の指には発達した吸盤がある。	
確認状況	春季及び夏季調査時に合計14地点100個体以上が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で1地点1個体、相当離れた地域で13地点100個体以上確認された。	
確認地点の生息環境	水田、水路、池、ワンド、たまり、落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、水辺は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、水路、水辺は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

e) 重要な昆虫類

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な昆虫類の予測結果は、表 8-4-1-33 に示すとおりである。

表 8-4-1-33(1) 重要な昆虫類の予測結果

ニホンカワトンボ (カワトンボ科)		
一般生態	東日本に分布する。 幼虫は平地から山地にいたる清流に生息する。 成虫・幼虫ともに昆虫等を食する。 成虫は、4月下旬から8月中旬まで見られる。	
確認状況	昆虫類調査において、春季調査時に4地点4個体が確認された。 底生動物調査において、春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計6地点16個体が確認された。 両調査で確認された合計10地点20個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	水田、小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(2) 重要な昆虫類の予測結果

ヤマサナエ (サナエトンボ科)		
一般生態	本州、四国、九州に分布する。 幼虫は主に平地か低山地の上流域の比較的緩やかな流れに生息する。 成虫・幼虫ともに昆虫等を食する。 成虫は4月上旬から7月中旬まで見られる。	
確認状況	昆虫類調査において、春季調査時に4地点4個体が確認された。 底生動物調査において、春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計11地点70個体が確認された。 両調査で確認された合計15地点74個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	水田、小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(3) 重要な昆虫類の予測結果

コシボソヤンマ (ヤンマ科)		
一般生態	北海道から九州にかけて分布する。 幼虫は主に平地及び丘陵地の木陰の多い流れに生息する。 成虫・幼虫ともに昆虫等を食する。 成虫は6月下旬から9月下旬まで見られる。 なお、徳江ら(2011)によると、同じヤンマ科のアオヤンマは平均2,260mで最大3,047mである。	
確認状況	底生動物調査において、春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計12地点49個体が確認された。 確認された12地点49個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(4) 重要な昆虫類の予測結果

コヤマトンボ (エゾトンボ科)		
一般生態	本州、四国、九州に分布する。 幼虫は主に丘陵地及び低山地の砂礫底等の河川に生息する。 成虫・幼虫ともに昆虫等を食する。 成虫は4月中旬から7月下旬まで見られる。	
確認状況	底生動物調査において、春季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(5) 重要な昆虫類の予測結果

シオヤトンボ (トンボ科)		
一般生態	北海道から九州にかけて分布する。 幼虫は主に平地から低山地の挺水植物がしげる湿地、休耕田等に分布する。 成虫・幼虫ともに昆虫等を食する。 成虫は3月下旬から8月下旬まで見られる。	
確認状況	底生動物調査において、夏季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	湿性地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である湿性地は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である湿性地は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(6) 重要な昆虫類の予測結果

ヒメアカネ (トンボ科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州に分布する。対馬、天草諸島等の島々にも産するが、産地は比較的限られている。主に平地から低山地の丈の低い水生植物が繁茂する滲出水のある湿地、丘陵の休耕田、廃田等に生息。幼虫は水生植物の根ぎわ、植物性沈殿物のある浮泥にまみれて生活している。北海道では7月初めから10月末、東海地方では5月下旬から出現して12月中旬まで見られ、8月後半から10月初め頃に最も多く成虫が出現する。	
確認状況	秋季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	水田、小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である水田、小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(7) 重要な昆虫類の予測結果

ケラ (ケラ科)		
一般生態	日本全土に分布する。 湿地、水田等の土に穴を掘って生息する。 雑食性である。 成虫は9~10月頃に羽化する。	
確認状況	春季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(8) 重要な昆虫類の予測結果

ヤチスズ (コオロギ科)		
一般生態	北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。 卵越冬で、年1~2化性である。	
確認状況	秋季調査時に3地点4個体が確認された。 確認された3地点4個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地、草地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(9) 重要な昆虫類の予測結果

クマスズムシ (クマスズムシ科)		
一般生態	本州、四国、九州、伊豆諸島八丈島、対馬、南西諸島(沖縄島、久米島まで)に分布する。 畑、草むらのやや湿ったところに生息し、卵越冬で年1化性である。	
確認状況	秋季調査時に2地点9個体が確認された。 確認された2地点9個体は改変の可能性がある範囲の近傍であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(10) 重要な昆虫類の予測結果

オナガササキリ (キリギリス科)		
一般生態	本州、四国、九州、南西諸島に分布する。 平地、丘陵地のチガヤ等がよく茂った草地及び水田に生息する。 イネ科植物を好んで食する。 成虫は7月頃から出現する。	
確認状況	秋季調査時に1地点2個体が確認された。 確認された1地点2個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	草地、耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である草地、耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である草地、耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(11) 重要な昆虫類の予測結果

クルマバッタ (バッタ科)		
一般生態	本州から南西諸島まで分布する。 草原に生息する。 成虫は7~11月に見られる。	
確認状況	秋季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地、草地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(12) 重要な昆虫類の予測結果

ショウリョウバッタモドキ (バッタ科)		
一般生態	本州、四国、九州に分布する。 チガヤ等のイネ科植物の草原に生息する。 成虫は8~11月に多い。	
確認状況	秋季調査時に10地点16個体が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で1地点2個体、相当離れた地域で9地点14個体確認された。	
確認地点の生息環境	耕作地、草地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地、草地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(13) 重要な昆虫類の予測結果

ミイデラゴミムシ (ホソクビゴミムシ科)		
一般生態	北海道から九州、琉球に分布する。 成虫は庭、畑、明るい林、河川の堤防等の石の下等に見られる。 幼虫、成虫とも肉食性で、幼虫はケラの卵塊を食する。 成虫は夏季に見られる。	
確認状況	春季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	耕作地	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である耕作地は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(14) 重要な昆虫類の予測結果

コガムシ (ガムシ科)		
一般生態	北海道から九州まで分布する。 植生の豊富な水田、湿地、池沼に見られる。	
確認状況	底生動物調査において、春季調査時に1地点1個体が確認された。 確認された1地点1個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・工事の実施に伴う夜間照明は、必要に応じて極力外部に向けないよう配慮することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(15) 重要な昆虫類の予測結果

トゲアリ (アリ科)		
一般生態	本州、四国、九州に分布する。 クロオオアリ等に一時的社会寄生する。立木の根際のでうろに巣を作る。 なお、久保田 (1988) によると、アリ科のクロヤマアリの移動距離は、巣から100m 以上である。	
確認状況	春季及び夏季調査時に合計 4 地点 6 個体が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で 2 地点 4 個体、相当離れた地域で 2 地点 2 個体確認された。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(16) 重要な昆虫類の予測結果

モンズメバチ (スズメバチ科)		
一般生態	北海道から九州まで分布する。 樹洞、土中及び壁間等に営巣する。 成虫は 5~10 月頃見られる。	
確認状況	夏季調査時に 1 地点 1 個体が確認された。 確認された 1 地点 1 個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	落葉広葉樹林	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-33(17) 重要な昆虫類の予測結果

オオイシアブ (ムシヒキアブ科)	
一般生態	<p>本州、四国、九州に分布する。 森林に見られる。 幼虫は太い朽木で発育する。 なお、上宮 (2002) によると、フライトミル法により同じムシヒキアブ科のアオメアブの飛翔能力を測定した結果、平均総飛翔距離は 1.71km、総飛翔時間は 32.38 分、総飛翔速度は 3.59km/h、最長連続飛翔距離は 0.22km である。</p>
確認状況	<p>春季調査時に 1 地点 1 個体が確認された。 確認された 1 地点 1 個体は改変の可能性がある範囲の近傍であった。</p>
確認地点の生息環境	<p>落葉広葉樹林</p>
予測結果	<p>工事の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、一部が消失・縮小するが、周辺に同質の生息環境が広く分布する。 ・したがって、生息環境は保全される。
	<p>鉄道施設の存在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍において生息が確認され、主な生息環境である落葉広葉樹林は、工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化はない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

f) 重要な魚類

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な魚類の予測結果は、表 8-4-1-34 に示すとおりである。

表 8-4-1-34(1) 重要な魚類の予測結果

アブラハヤ (コイ科)		
一般生態	日本海側では青森県から福井県にかけて、太平洋・瀬戸内海側では青森県から岡山県にかけて分布する。 主に河川の上流から中流域に生息し、瀬及び平瀬の底層にいる。 産卵期は春から初夏で、主として淵、平瀬の砂泥底又は砂礫底に産卵する。 雑食性で、底生動物、付着藻類、落下昆虫等を食する。 なお、棟方(2009)らによると、本種の移動距離は約600mの河川区間内を移動・分散する。	
確認状況	春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計7地点100個体以上が確認された。 確認された7地点100個体以上は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-34(2) 重要な魚類の予測結果

ドジョウ (ドジョウ科)		
一般生態	ほぼ日本全国に分布する。 水田及び湿地、周辺の細流に生息する。平地部を中心に生息するが、圃場整備されていない水田が近くにあれば、かなり上流域にもいる。 西日本での産卵期は6～7月。水田周辺では、しろかきと同時に周囲の用水路から水田に遡上する。遡上後、水田で何日かを過ごしたあと夜間に産卵する。 雑食性である。 なお、西田ら(2005)によると、本種の移動距離は100～300mである。	
確認状況	春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計11地点27個体が確認された。 その内、改変の可能性がある範囲の近傍で1地点1個体、相当離れた地域で10地点26個体確認された。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性がある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-34(3) 重要な魚類の予測結果

ホトケドジョウ (ドジョウ科)		
一般生態	青森県を除く東北地方から三重県、京都府及び兵庫県に分布する。 流れの緩やかな細流の砂泥底に生息する。 産卵期は3月下旬から6月上旬で、水草等に産卵・放精する。 主に浮遊性から底生性の小動物を食する。 なお、加地ら(2011)によると、本種の移動距離は約400m以上であることを調査より得ている。	
確認状況	春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計11地点100個体以上が確認された。 確認された11地点100個体以上は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-34(4) 重要な魚類の予測結果

メダカ南日本集団 (メダカ科)		
一般生態	岩手県南部以南の本州太平洋側、四国、九州、対馬及び屋久島等の周辺の島嶼、京都府から山口県までの日本海側、奄美諸島及び沖縄諸島に分布する。 平野部の河川、湖沼、水田地帯の用水路等に生息し、止水及び緩流域を好む。産卵期は主に春から夏で、水草等に産卵する。食性はプランクトンの他、小さな落下昆虫等を食する雑食性である。 近年、本種とメダカ北日本集団の2種に分けられ、分布が異なる他、体側鱗の黒い縁取りの有無等、外部形態によっても区別される。 なお、佐原(私信)によると、水路のみで生息する本種の移動距離は条件がよければ1,500m程度である。	
確認状況	春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計11地点43個体を確認された。 その内、改変の可能性のある範囲の近傍で3地点10個体、相当離れた地域で8地点33個体確認された。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、改変の可能性のある範囲の近傍及び相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

g) 重要な底生動物

予測地域に生息地が存在すると考えられる重要な底生動物の予測結果は、表 8-4-1-35 に示すとおりである。

表 8-4-1-35(1) 重要な底生動物の予測結果

モノアラガイ (モノアラガイ科)		
一般生態	北海道から九州まで各地に分布する。 小川、川の淀み、池沼、水田等の水草、礫に付着している。泥底にいることもある。 水から出るとは少ない。植物食で、微小な藻類をヤスリのような歯舌で削り取って食する。水温が高くなる6月頃から産卵を繰り返す。水生植物の葉及び茎に長さ10mm程度の透き通ったゼラチン質の卵塊を産む。	
確認状況	冬季調査時に2地点7個体が確認された。 確認された2地点7個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-35(2) 重要な底生動物の予測結果

スジエビ (テナガエビ科)		
一般生態	北海道から九州、種子島、屋久島に分布する。日本産の淡水エビとしては最も分布が広い。 池、沼、湖等の止水域から河川まで多岐にわたる。こうした生息域の違いは、体色、大きさの違いとなって見られることも多い。 春から秋にかけて水温が上昇すると繁殖期を迎える。雌は比較的大型の緑色の卵を腹部に抱く。卵はゾエア幼生の形で孵化し、稚エビに変態して着底する。	
確認状況	秋季及び冬季調査時に合計4地点25個体が確認された。 確認された4地点25個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-35(3) 重要な底生動物の予測結果

サワガニ (サワガニ科)		
一般生態	本州、四国、九州に分布する。 河川の上流域に生息し、砂礫、小石の多い場所を好む。若い個体は流れの緩やかな水中の小石、落葉下に潜んでいるが、大型の個体は周辺の湿地等でも見られる。日本産の淡水性カニ類で唯一、海に下らず淡水で産卵する。雑食性でミミズ、ヨコエビ類、水生昆虫、落葉等を食する。水質汚濁に弱いため、水のきれいな河川の指標種とされる。	
確認状況	春季、夏季、秋季及び冬季調査時に合計 8 地点 61 個体が確認された。 確認された 8 地点 61 個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

表 8-4-1-35(4) 重要な底生動物の予測結果

モクズガニ (モクズガニ科)		
一般生態	日本全国に分布する。 河川の下流域から中流域に生息する。 繁殖期は 10 月から翌年 6 月までと長い。この季節になると雌雄ともに河川の下流域に下る。食用として利用されることも多い。日本産の淡水カニとしては最大の種である。	
確認状況	夏季調査時に 1 地点 1 個体が確認された。 確認された 1 地点 1 個体は相当離れた地域であった。	
確認地点の生息環境	小河川	
予測結果	工事の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・工事の実施に伴う排水は、必要に応じて沈砂池、濁水処理装置を配置し処理することにより、本種の生息環境への影響は及ばない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。
	鉄道施設の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・本種は、相当離れた地域において生息が確認され、主な生息環境である小河川は、改変されない。 ・したがって、生息環境に変化は生じない。

ウ) 文献調査でのみ確認された重要な種に対する予測結果

文献調査により改変区域周辺に生息する可能性が高いと考えられる重要な種の内、現地調査では確認されなかった重要な種は、哺乳類 1 種、鳥類 41 種、爬虫類 4 種、両生類 1 種、昆虫類 67 種、魚類 7 種、底生動物 0 種であった。

a) 哺乳類

予測対象種は、ヒナコウモリの 1 種である。

ヒナコウモリは、山地や里地・里山の樹林などが主な生息環境である。このため、工事の実施及び鉄道施設の存在により、生息環境の一部が消失・縮小する可能性があるが、その程度はわずかであり、周辺に同質の生息環境が広く分布することから生息環境は確保される。

したがって、事業の実施による影響の程度はわずかであり、重要な哺乳類の生息環境は保全されると予測される。

b) 鳥類

予測対象種は、ウズラ、ヤマドリ、オシドリ、ヨシゴイ、ミゾゴイ、ササゴイ、チュウサギ、クイナ、ヒクイナ、ツツドリ、カッコウ、ヨタカ、ヒメアマツバメ、タゲリ、イカルチドリ、コチドリ、ヤマシギ、タシギ、クサシギ、キアシシギ、ハマシギ、タマシギ、オオコノハズク、アオバズク、アカショウビン、ヤマセミ、ブッポウソウ、コチョウゲンボウ、サンショウクイ、チゴモズ、アカモズ、コシアカツバメ、ヤブサメ、オオヨシキリ、ミソサザイ、カワガラス、トラツグミ、クロツグミ、カヤクグリ、イスカ、ノジコの 41 種である。

これらのうち、ヤマドリ、ミゾゴイ、ツツドリ、カッコウ、ヨタカ、オオコノハズク、アオバズク、アカショウビン、ブッポウソウ、サンショウクイ、ヤブサメ、ミソサザイ、トラツグミ、クロツグミ、カヤクグリ、イスカ、ノジコは、山地や里地・里山の樹林が主な生息環境である。ウズラ、コチョウゲンボウは、山地や里地・里山の草地が主な生息環境である。ヤマシギ、チゴモズ、アカモズは、山地や里地・里山の樹林や草地が主な生息環境である。オシドリ、ササゴイ、チュウサギ、クイナ、ヒクイナ、タシギ、クサシギ、タマシギ、ヤマセミ、カワガラスは、山地や里地・里山の湿地や水域が主な生息環境である。キアシシギ、ハマシギ、オオヨシキリは、里地・里山や低地・平地の湿地や水域が主な生息環境である。ヒメアマツバメ、コシアカツバメは、山地や里地・里山の草地や住宅地が主な生息環境である。タゲリは、山地や里地・里山の草地や湿地が主な生息環境である。イカルチドリ、コチドリは、山地や里地・里山の礫河原などが主な生息環境である。このため、工事の実施及び鉄道施設の存在により、生息環境の一部が消失・縮小する可能性があるが、その程度はわずかであり、周辺に同質の生息環境が広く分布することから生息環境は確保される。

したがって、事業の実施による影響の程度はわずかであり、重要な鳥類の生息環境は保全されると予測される。

c) 爬虫類

予測対象種は、クサガメ、ジムグリ、シロマダラ、ニホンマムシの 4 種である。

これらのうち、シロマダラ、ニホンマムシは、山地や里地・里山の樹林が主な生息環境である。ジムグリは、山地や里地・里山の樹林や草地が主な生息環境である。クサガメは、里地・里山の水域などが主な生息環境である。このため、工事の実施及び鉄道施設の存在により、生息環境の一部が消失・縮小する可能性があるが、その程度はわずかであり、周辺に同質の生息環境が広く分布することから生息環境は確保される。

したがって、事業の実施による影響の程度はわずかであり、重要な爬虫類の生息環境は保全されると予測される。

d) 両生類

予測対象種は、トウキョウダルマガエルの1種である。

トウキョウダルマガエルは、里地・里山の湿地や水域などが主な生息環境である。このため、工事の実施及び鉄道施設の存在により、生息環境の一部が消失・縮小する可能性があるが、その程度はわずかであり、周辺に同質の生息環境が広く分布することから生息環境は確保される。

したがって、事業の実施による影響の程度はわずかであり、重要な両生類の生息環境は保全されると予測される。

e) 昆虫類

予測対象種は、オオイトトンボ、キイトトンボ、モートンイトトンボ、モノサシトンボ、ホソミオツネトンボ、オツネトンボ、コサナエ、カトリヤンマ、ハラビロトンボ、チョウトンボ、マイコアカネ、クマコオロギ、ヒメコオロギ、タンボコオロギ、マツムシ、クツワムシ、カヤキリ、イナゴモドキ、ハルゼミ、イトアメンボ、タイコウチ、ミゾナシミズムシ、ズイムシハナカメムシ、エリザハンミョウ、ニワハンミョウ、ヒラタマルゴミムシ、アシミゾヒメヒラタゴミムシ、キアシマルガタゴミムシ、アカガネアオゴミムシ、コアトワアオゴミムシ、ムナビロアオゴミムシ、ツヤキベリアオゴミムシ、ニセトックリゴミムシ、マルチビゲンゴロウ、コシマチビゲンゴロウ、シジミガムシ、チャムネハラホソハネカクシ、クシヒゲハネカクシ、ミヤマクワガタ、マエカドコエンマコガネ、ヒゲコガネ、ハンノヒメコガネ、ヒメトラハナムグリ、ハナムグリ、ウバタマムシ、ウバタマコメツキ、ヘイケボタル、ツヤケシハナカミキリ、フタコブルリハナカミキリ、ミドリカミキリ、クロトラカミキリ、シロスジカミキリ、オオアオゾウムシ、ホシアシブトハバチ、オオセイボウ本土亜種、ヤマトアシナガバチ、ルリモンハナバチ、クロマルハナバチ、ミカドガガンボ、クロベッコウハナアブ、ホソバセセリ、ウラギンスジヒョウモン、ヒョウモンチョウ本州中部亜種、オオムラサキ、ウラナミジャノメ本土亜種、スキバホウジャク、コシロシタバの67種である。

これらのうち、ハルゼミ、クシヒゲハネカクシ、ミヤマクワガタ、ヒメトラハナムグリ、ウバタマムシ、ウバタマコメツキ、ツヤケシハナカミキリ、フタコブルリハナカミキリ、ミドリカミキリ、クロトラカミキリ、シロスジカミキリ、ミカドガガンボ、クロベッコウハナアブ、オオムラサキ、コシロシタバは、里地・里山の樹林が主な生息環境である。クマコオロギ、ヒメコオロギ、マツムシ、カヤキリ、イナゴモドキ、ズイムシハナカメムシ、ニワハンミョウ、アカガネアオゴミムシ、コアトワアオゴミムシ、ハナムグリ、ウラギンスジヒョウモン、ヒョウモンチョウ本州中部亜種、ウラナミジャノメ本土亜種、スキバホウジャクは、里地・里山の草地が主な生息

環境である。クツワムシ、ヒラタマルゴミムシ、マエカドコエンマコガネ、ホシアシブトハバチ、オオセイボウ本土亜種、ヤマトアシナガバチ、ルリモンハナバチ、クロマルハナバチ、ホソバセセリは、里地・里山の樹林や草地が主な生息環境である。タンボコオロギ、イトアメンボ、アシミゾヒメヒラタゴミムシ、ムナビロアオゴミムシ、ツヤキベリアオゴミムシ、ニセトックリゴミムシ、チャムネハラホソハネカクシ、ヘイケボタルは、里地・里山の湿地が主な生息環境である。ミズナシミズムシ、コシマチビゲンゴロウは、里地・里山の水域が主な生息環境である。オオイトトンボ、キイトトンボ、モートンイトトンボ、モノサシトンボ、ホソミオツネントンボ、オツネントンボ、コサナエ、カトリヤンマ、ハラビロトンボ、チョウトンボ、マイコアカネ、タイコウチ、マルチビゲンゴロウ、シジミガムシは、里地・里山の湿地や水域が主な生息環境である。エリザハンミョウ、キアシマルガタゴミムシ、ヒゲコガネ、ハンノヒメコガネ、オオアオゾウムシは、里地・里山の河原などが主な生息環境である。このため、工事の実施及び鉄道施設の存在により、生息環境の一部が消失・縮小する可能性があるが、その程度はわずかであり、周辺に同質の生息環境が広く分布することから生息環境は確保される。

したがって、事業の実施による影響の程度はわずかであり、重要な昆虫類の生息環境は保全されると予測される。

f) 魚類

予測対象種は、スナヤツメ類、ニホンウナギ、キンブナ、カマツカ、シマドジョウ、ギバチ、ナマズの7種である。

これらのうち、スナヤツメ類、ニホンウナギ、キンブナ、カマツカ、シマドジョウ、ギバチは、里地・里山の水域が主な生息環境である。ナマズは、里地・里山の湿地や水域などが主な生息環境である。このため、工事の実施及び鉄道施設の存在により、生息環境の一部が消失・縮小する可能性があるが、その程度はわずかであり、周辺に同質の生息環境が広く分布することから生息環境は確保される。

したがって、事業の実施による影響の程度はわずかであり、重要な魚類の生息環境は保全されると予測される。

g) 底生動物

予測対象種はない。

2) 環境保全措置の検討

ア. 環境保全措置の検討の状況

本事業では、計画の立案の段階において、動物に係る環境影響を回避又は低減するため「資材運搬等の適切化」、「濁水処理施設及び仮設沈砂池の設置」、「工事施工ヤード等の林縁保護植栽等による動物の生息環境の確保」及び「防音シート、低騒音・低振動型の建設機械の採用」について検討した。さらに、事業者により実行可能な範囲内で、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に伴う車両の運行、トンネルの工事又は工事施工ヤード及び工事用道路の設置）及び鉄道施設（トンネル）の存在による動物に係る環境影響を回避又は低減することを目的として、環境保全措置の検討を行った。

検討にあたっては、「工事に伴う改変区域をできるだけ小さくする」を基本とした上で、さらに影響を低減させる措置を実施する。また、その結果を踏まえ、必要な場合には、損なわれる環境の有する価値を代償するための措置を検討した。

環境保全措置の検討の状況を表 8-4-1-36 に示す。

表 8-4-1-36 環境保全措置の検討の状況

環境保全措置	保全対象種	実施の適否	適否の理由
資材運搬等の適切化	保全対象種全般	適	運行ルートを自然環境保全地域など動物の重要な生息地をできる限り回避するよう設定し、配車計画を運行ルートに応じた車両の台数や速度、運転方法などに留意して計画することにより動物全般への影響を低減できることから、環境保全措置として採用する。
濁水処理施設及び仮設沈砂池の設置	河川を生息環境とする保全対象種全般	適	濁水処理施設及び仮設沈砂池の設置により、濁水の発生が抑えられることで、魚類等の生息環境への影響を低減できることから、環境保全措置として採用する。
工事施工ヤード等の林縁保護植栽等による動物の生息環境の確保	保全対象種全般	適	改変する区域の一部に工事の実施に際し、周辺の植生を考慮した上で、使用した工事施工ヤード等の定期的な下刈りや、適切に管理しながら林縁保護植栽等を図り、その効果を確認することにより、林内環境への影響を軽減し、重要な種の生息環境への影響を低減できることから環境保全措置として採用する。
防音シート、低騒音・低振動型の建設機械の採用	保全対象種全般	適	防音シート、低騒音・低振動型の建設機械の採用により、騒音、振動の発生が抑えられることから、鳥類等の生息環境への影響を低減できることから、環境保全措置として採用する。
動物個体の類似環境への誘導	ホンシュウカヤネズミ	適	オギ群落の草刈りを一定方向に複数回に分けて行う等の工夫をし、影響範囲内に生息する個体を隣接する類似環境へ誘導することにより、重要な種の個体への影響を回避できることから、環境保全措置として採用する。
工事に伴う改変区域をできるだけ小さくする	ホンシュウカヤネズミ	適	工事ヤード内に設置する諸設備を検討し、設置する設備やその配置を工夫することなどにより生息環境の改変をできるだけ小さくすることで、重要な種の生息地（オギ群集）が70%以上残置され、生息環境への影響を回避又は低減できることから、環境保全措置として採用する。

工事計画を検討するにあたり、重要な種の生息状況を踏まえ、専門家の助言等を踏まえ、環境影響を可能な限り回避又は低減し、必要な場合には損なわれる環境の有する価値を代償するための措置を講じていく。

イ. 環境保全措置の実施主体、方法その他の環境保全措置の実施の内容

本事業では、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に伴う車両の運行、トンネルの工事又は工事施工ヤード及び工事用道路の設置）及び鉄道施設（トンネル）の存在による動物に係る環境影響を低減させるため、環境保全措置として「資材運搬等の適切化」、「濁水処理施設及び仮設沈砂池の設置」、「工事施工ヤード等の林縁保護植栽等による動物の生息環境の確保」「防音シート、低騒音・低振動型の建設機械の採用」、「動物個体の類似環境への誘導」及び「工事に伴う改変区域をできるだけ小さくする」を実施する。

また、工事排水の排出先となる河川においては、モニタリングを実施し、排水による影響を監視していく計画としている。

環境保全措置の内容を表 8-4-1-37 に示す。

表 8-4-1-37(1) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
保全対象種	保全対象種全般	
実施内容	種類・方法	資材運搬等の適切化
	位置・範囲	資材運搬経路
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	運行ルートを自然環境保全地域など動物の重要な生息地をできる限り回避するよう設定し、配車計画を運行ルートに応じた車両の台数や速度、運転方法などに留意して計画することにより動物全般への影響を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-4-1-37(2) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
保全対象種	河川を生息環境とする保全対象種全般	
実施内容	種類・方法	濁水処理施設及び仮設沈砂池の設置
	位置・範囲	工事施工ヤード
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	濁水処理施設及び仮設沈砂池の設置により、濁水の発生が抑えられることで、魚類等の生息環境への影響を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-4-1-37(3) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
保全対象種	保全対象種全般	
実施内容	種類・方法	工事施工ヤード等の林縁保護植栽等による動物の生息環境の確保
	位置・範囲	工事施工ヤード
	時期・期間	鉄道施設の完成時
環境保全措置の効果	改変する区域の一部に工事の実施に際し、周辺の植生を考慮した上で、使用した工事施工ヤード等の定期的な下刈りや、適切に管理しながら林縁保護植栽等を図り、その効果を確認することにより、林内環境への影響を軽減し、重要な種の生息環境への影響を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-4-1-37(4) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
保全対象種	保全対象種全般	
実施内容	種類・方法	防音シート、低騒音・低振動型の建設機械の採用
	位置・範囲	改変区域
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	防音シート、低騒音・低振動型の建設機械の採用により、騒音、振動の発生が抑えられることで、鳥類等の生息環境への影響を低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-4-1-37(5) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
保全対象種	ホンシュウカヤネズミ	
実施内容	種類・方法	動物個体の類似環境への誘導
	位置・範囲	改変区域及び周囲
	時期・期間	工事中
環境保全措置の効果	オギ群落の草刈りを一定方向に複数回に分けて行う等の工夫をし、影響範囲内に生息する個体を隣接する類似環境へ誘導することにより、重要な種の個体への影響を回避できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

表 8-4-1-37(6) 環境保全措置の内容

実施主体	東海旅客鉄道株式会社	
保全対象種	ホンシュウカヤネズミ	
実施内容	種類・方法	工事に伴う改変区域をできるだけ小さくする
	位置・範囲	工事施工箇所
	時期・期間	工事前
環境保全措置の効果	工事ヤード内に設置する諸設備を検討し、設置する設備やその配置を工夫することなどにより生息環境の改変をできるだけ小さくすることで、重要な種の生息地（オギ群集）が70%以上残置され、生息環境への影響を回避又は低減できる。	
効果の不確実性	なし	
他の環境への影響	なし	

ウ. 環境保全措置の効果及び当該環境保全措置を講じた後の環境の変化の状況

環境保全措置の効果は表 8-4-1-37 に示すとおりである。環境保全措置を実施することで、動物に係る環境影響が回避又は低減される。

3) 事後調査

動物に係る影響について、予測の不確実性は小さいこと、また実施する環境保全措置について、効果に係る知見が蓄積されていると判断できることから、事後調査は実施しない。

4) 評価

ア. 評価の手法

7) 回避又は低減に係る評価

調査、予測結果及び環境保全措置の検討を行った場合はその結果について、事業者により実行可能な範囲内で回避又は低減がなされているか、見解を明らかにすることにより行った。

イ. 評価結果

7) 回避又は低減に係る評価

計画路線は、計画段階において、大部分をトンネル構造にする等、改変面積を極力小さくする計画とし、動物への影響の回避、低減を図っている。

一部の種は、生息環境の一部は保全されない可能性があるとして予測されたが、表 8-4-1-37 に示した環境保全措置を確実に実施することで、影響の回避又は低減に努める。

今後の本事業における詳細な計画検討にあたっては、環境影響評価の結果に基づき環境保全に配慮して行うこととし、本環境影響評価の段階において予測し得なかった著しい環境への影響が生じた場合には、必要に応じて専門家の助言等を踏まえて、別途対策を検討する。

このことから、動物に係る環境影響の回避又は低減が図られていると評価する。